

高等学校における教科指導の充実

外国語科（英語）

「授業を英語で行う」ための工夫

栃木県総合教育センター

平成23年3月

ま え が き

21世紀は、新しい知識・情報・技術が、政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われていています。そのような時代を生きるために、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になります。また、各種の調査からは、日本の児童生徒について、思考力・判断力・表現力、知識・技能の活用、学習意欲、学習習慣・生活習慣などで課題があると分析されました。このような状況を踏まえて、平成20年1月の中央教育審議会答申で学習指導要領の改訂の方向性が示され、平成21年3月に高等学校学習指導要領が告示されました。

平成22年12月に公表されたOECD生徒の学習到達度調査（PISA2009年）の結果においては、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーのそれぞれで下位層が減少し、上位層が増加したことから、読解力を中心に日本の生徒の学力は改善傾向にあると考えられていますが、課題は依然として残されています。今後とも引き続き、基礎的・基本的な知識の習得や、問題解決のための思考力・判断力・表現力の育成に努めていくことが求められます。

栃木県総合教育センターでは、基礎・基本の確実な定着を図る教科指導の在り方について研究するとともに、その成果を普及することで生徒の学力の向上に資することを目的に、平成17年度から「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」を行ってきました。今年度は、昨年度に引き続き、「今回の学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、各種調査の結果から指摘されている課題の解決を図るための教科指導の在り方を探る」ことに重点を置き、国語科、地理歴史科、数学科、理科、外国語科（英語）の各教科で調査研究に取り組みました。本冊子はその成果をまとめたものであり、教科指導を充実させる一助として、御活用いただければ幸いです。

最後に、調査研究を進めるにあたり、御協力いただきました研究協力委員の方々に深く感謝申し上げます。

平成23年3月

栃木県総合教育センター所長

瓦 井 千 尋

目 次

はじめに -----	1
事例 1 英語 I における「授業を英語で行う」工夫 -----	3
事例 2 英語 II における「授業を英語で行う」工夫 -----	1 8
事例 3 リーディングにおける「授業を英語で行う」工夫 -----	3 2
おわりに -----	4 5

※本資料は、栃木県総合教育センターのホームページ「とちぎ学びの杜」内、「調査研究」と「教材研究のひろば」のコーナーにも掲載しています。

「とちぎ学びの杜」 <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>

はじめに

1 調査研究の背景

平成21年3月に告示された学習指導要領の改訂においては、「OECD生徒の学習到達度調査（PISA調査）」など各種の調査から明らかにされた、次のような課題が反映されている。

- ①思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題において、無答率が高いという課題が見られる。
- ②読解力に関しては成績分布の分散が拡大し、成績中位層が減り、低位層が増加している。
- ③家庭での学習時間の減少など、学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題が見られる。
- ④自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下といった課題が見られる。

特に、教科の指導においては、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させること、知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成することが重視されている。その実現のためには、「習得・活用・探究」のバランスを取った学習活動の展開が重要であり、高等学校学習指導要領解説の総則では、次のように述べられている。

＜高等学校学習指導要領解説総則 第1章 総説 第2節 改訂の基本方針（抜粋）＞

②知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること。

確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむことの双方が重要であり、これらのバランスを重視する必要がある。

このため、各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視するとともに、観察・実験やレポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を充実すること、さらに総合的な学習の時間を中心として行われる、教科等の枠を超えた横断的・総合的な課題について各教科等で習得した知識・技能を相互に関連付けながら解決するといった探究活動の質的な充実を図ることなどにより思考力・判断力・表現力等を育成することとしている。

また、これらの学習を通じて、その基盤となるのは言語に関する能力であり、国語科のみならず、各教科等においてその育成を重視している。さらに、学習意欲を向上させ、主体的に学習に取り組む態度を養うとともに、家庭との連携を図りながら、学習習慣を確立することを重視している。

これらのことを踏まえつつ、各種調査の結果から指摘されている課題の解決を図るための教科指導の在り方を探る調査研究に取り組んだ。

※本冊子においては、平成11年3月に告示された学習指導要領を「現行の学習指導要領」、平成21年3月に告示された学習指導要領を「新学習指導要領」として記す。

Ⅱ 外国語（英語）に関して

平成21年3月9日に告示された高等学校学習指導要領（以下「新学習指導要領」と称す）の「第3款 英語に関する各科目に共通する内容等」に

4 英語に関する各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする。

と示されている。この中で、「授業は英語で行う」という部分だけがクローズアップされ、報道等でも取り上げられた。しかし、重要なのはその前後の文言である。なぜ英語で授業をするのか。それは「生徒が英語に触れる場면을充実」させるためであり、「授業を実際のコミュニケーションの場面とする」ためである。

「授業は英語で行うことを基本とする」とは、教師が授業を英語で行うとともに、英語による言語活動を行うことを授業の中心とし、生徒にも授業の中でできるだけ多く英語を使用させることである。これは、生徒が授業の中で、英語に触れたり英語でコミュニケーションを行ったりする機会を充実させるとともに、生徒が英語を英語のまま理解したり表現したりすることに慣れるような指導の充実を図ることを意味する。そのためには、簡単な指示のみを英語で行うのではなく、内容を理解させる際も視聴覚教材等を用いながら英問英答をしたり、英文の内容を簡単な英文で言い換えたりすることにより、教師は授業を英語で行うよう努めなければならない。つまり、授業中に英語でのインタラクションをいかに効果的に図っていくかが重要になる。

新学習指導要領では、外国語科の主な改訂の基本方針がいくつか示されたが、その一つは

○「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識について、自らの体験や考えなどと結び付けながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することが可能となるよう、4技能を総合的に育成する指導を充実する。

である。4技能を総合的に育成しながら、「生徒が英語に触れる機会を充実する」または「授業を実際のコミュニケーションの場とする」ための学習活動等について、調査研究を行った。どうすれば効果的に授業を英語で行い、生徒のコミュニケーション能力を伸長できるかを研究の主題とし、指導法の工夫改善に取り組んだ。

<研究協力委員>

栃木県立上三川高等学校	教諭	有吉久美子
栃木県立栃木翔南高等学校	教諭	加藤正雄
栃木県立今市高等学校	教諭	宮田勇

<研究委員>

栃木県総合教育センター研修部	指導主事	大岡寿子
----------------	------	------

事例 1

英語 I における「授業を英語で行う」工夫

1 課題設定の理由

新学習指導要領では、「生徒が英語に触れる機会を充実すると共に、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行う」ことが明記された。「授業を英語で行う」ためには、現在の授業を見直し、指導法を改善しなければならない。現在日本語で読解をしているが、それをそのまま英語で行っても生徒は理解できず、教師だけが英語で話しているという状況が生まれてしまうのではないかと考える。新学習指導要領に示されている「生徒が英語に触れる機会を充実」させることと、「授業を実際のコミュニケーションの場面とする」ことを重要な要素と捉え、「いかに教師が流ちょうな英語で授業をするか」でなく、「生徒が英語に触れる機会をいかに増やすか、英語を英語のまま理解したり、英語で自己表現したりするコミュニケーションの場面をどのように設定するか」ということに焦点をあて、英語 I の授業において「授業を英語で行う」ための研究を行うことにした。

2 生徒の実態及び仮説の設定

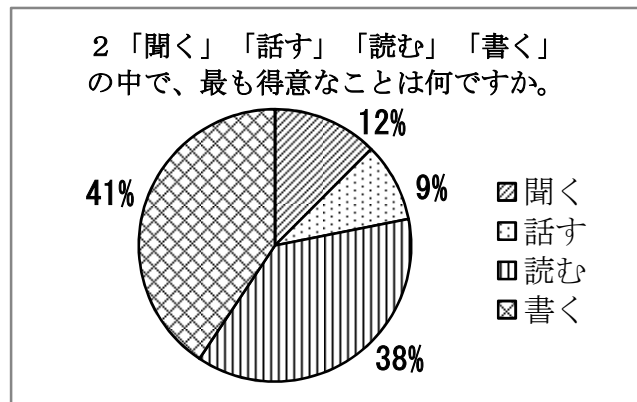
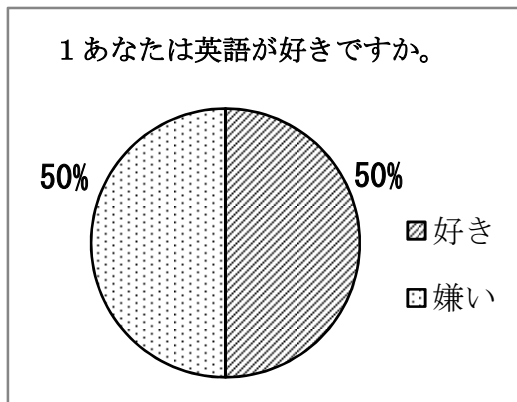
(1) 事前アンケート

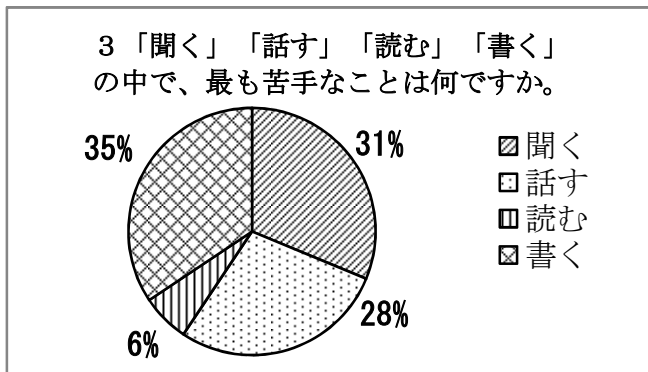
5月末に英語学習に対する意識を調査するために、以下のようなアンケートを実施した。今回のアンケートの調査対象とした生徒は、第1学年習熟度別クラスの32名である。英語 I は3単位の履修となる。

<実施したアンケート>

- 1 あなたは英語が好きですか。
- 2 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も得意なことは何ですか。
- 3 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も苦手なことは何ですか。
- 4 英語を「聞く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
- 5 英語を「話す」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
- 6 英語を「読む」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
- 7 英語を「書く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。

<アンケート結果>





<以下は主なものを抜粋>

- 4 英語を「聞く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・相手の伝えたいことをきちんと理解できるようになりたい。
 - ・映画やラジオで内容を理解できるようになりたい。
 - ・英語版のアニメや洋楽を理解できるようになりたい。
- 5 英語を「話す」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・外国人に通じる発音ができるようになりたい。
 - ・話すときに、考えたり、つかえたりしないようにしたい。
 - ・日常生活に必要な最低限のことを話せるようになりたい。
- 6 英語を「読む」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・辞書を引かずに読めるようになりたい。
 - ・教科書を上手に読めるようになりたい。
- 7 英語を「書く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・自分の考えていることを伝えられるような文を書けるようになりたい。
 - ・意味が通じるようにきちんとした英文が書けるようになりたい。
 - ・手紙やメールなどを書けるようになりたい。

アンケートの集計結果から、生徒のちょうど半数が英語を「好き」と回答し、「書くこと」に次いで「読むこと」を得意とする生徒が多いことが分かった。これは、これまでの訳読を中心とした授業で、「読む」という活動が多く、さらに読んだことに対して何か一言書くという作業を毎時間取り入れてきたためであると考えられる。一方、苦手とすることのトップも「書くこと」が挙がっており、次いで「聞くこと」「話すこと」となっていた。「書くこと」が得意と苦手の双方のトップに挙がっているのは、活動として「書くこと」は行っているものの、ただ何となく書いているという生徒が多く、常に受け身の姿勢で「書かされているから書く」という意識の生徒が多いからではないかと考える。「聞くこと」「話すこと」に対する苦手意識が多いのは、「自分の言いたいことを伝え、相手の伝えたいことをきちんと理解する」という生徒の願いを叶えるような活動の機会が授業中に少なかったことがあるのではないかとと思われる。

(2) 事前アンケートに基づく仮説

事前アンケートを基に、以下のような仮説を立てた。

仮説1 教師の英語の発話量を増やすことで、英語に触れる機会が増え、「聞くこと」への苦手意識を減らすことができる。

仮説2 教師との英語でのインタラクションを増やしたり、ペアワークやグループワークを用いて英語で表現する場面を増やしたりすることで、「話すこと」への抵抗を減らすことができる。

仮説3 コミュニケーション活動を前提とした「書く」活動を段階的に取り入れることで、「書くこと」への意欲を高めることができる。

3 本研究の流れ

本研究は、以下のA、B、Cの3つの活動を、段階Ⅰ（6、7月）、段階Ⅱ（9、10月）、段階Ⅲ（11月）の三つに分け、段階的に実施した。

活動A：導入に関する活動

活動B：本文の内容理解に関する活動

活動C：本文に基づく表現に関する活動

	活動A		活動B	活動C	
段階Ⅰ (6、7月)	単語と意味のマッピング 事例①	<ul style="list-style-type: none"> ・口頭だけの oral introduction 事例② ・PCを用いての oral introduction 事例③ 	教師から生徒への英問英答 事例①	key word を用いての要約文 事例①	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマに関する英作文 事例② ・重要表現定着のためのコミュニケーション活動 事例③
段階Ⅱ (9、10月)	単語と説明文のマッピング 事例④	<ul style="list-style-type: none"> イラストを用いた oral introduction 事例⑤ 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒同士での T/F 事例② ・心情把握のための文の抜粋 事例③ 		本課のテーマに関する英作文の発表 事例④
段階Ⅲ (11月)	単語の別の表現での言い換え 事例⑥		<ul style="list-style-type: none"> ・生徒同士での Q&A 事例④ ・key sentence の抜粋と理由 事例⑤ ・story reproduction 事例⑥ 		story telling 事例⑤

4 実践内容

(1) 段階Ⅰ（6、7月）

段階Ⅰの到達目標

活動Aに関して

- ・新出単語や熟語を、その意味から英語で答えることができる。
- ・oral introduction を聞いて、本文の概要を推測することができる。

活動Bに関して

- ・英問英答によって内容を理解することができる。

活動Cに関して

- ・key word をつなげながら、要約文を書くことができる。
- ・地球温暖化を防ぐために、自分ができていることを英語で書き、発表することができる。

使用教科書 POWWOW ENGLISH COURSE I

(ア)活動Aに関する事例① 新出単語・熟語の確認

新出単語や熟語の定着を図るため、ペアになり、互いに問題を出し合いながら、解答数を競い合うという活動を行った。ワークシート(資料1)を配布し、一方の生徒が英単語を言い、もう一方の生徒がその意味を言う、または、その逆で意味から英単語を言うという内容で、90秒間でいくつできるかを競わせた。留意した点は、速さを競うあまり、発音があいまいにならないように、何度も発音練習を実施したことである。また、単調にならないように、ペアを毎回変えたり、制限時間を短くしたりした。

<資料1>

Class [] No [] Name []		
90-second quiz		
1	<input checked="" type="checkbox"/> the Maldives	<input checked="" type="checkbox"/> 名: モルディブ共和国
2	<input checked="" type="checkbox"/> paradise	<input checked="" type="checkbox"/> 名: 楽園, 天国
3	<input checked="" type="checkbox"/> the Indian Ocean	<input checked="" type="checkbox"/> 名: インド洋
4	<input checked="" type="checkbox"/> Mole	<input checked="" type="checkbox"/> 名: マレ
5	<input checked="" type="checkbox"/> capital	<input checked="" type="checkbox"/> 名: 首都
6	<input checked="" type="checkbox"/> surf the Net	<input checked="" type="checkbox"/> ネットサーフィンをする
7	<input checked="" type="checkbox"/> happen to~	<input checked="" type="checkbox"/> 偶然~する
8	<input checked="" type="checkbox"/> according to~	<input checked="" type="checkbox"/> ~によれば, ~によると
9	<input checked="" type="checkbox"/> website	<input checked="" type="checkbox"/> 名: インターネットのウェブサイト
10	<input checked="" type="checkbox"/> be located	<input checked="" type="checkbox"/> 位置する
11	<input checked="" type="checkbox"/> consist of~	<input checked="" type="checkbox"/> ~から成る, ~から構成されている
12	<input checked="" type="checkbox"/> island	<input checked="" type="checkbox"/> 名: 島
13	<input checked="" type="checkbox"/> visitor	<input checked="" type="checkbox"/> 名: 訪問者, 観光客
14	<input checked="" type="checkbox"/> scuba diving	<input checked="" type="checkbox"/> 名: スキューバダイビング
15	<input checked="" type="checkbox"/> ~, and so on	<input checked="" type="checkbox"/> ~など

1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目
10	13		11		

(イ)活動Aに関する事例② oral introduction その1

これまで授業の導入は日本語で行っていた。英語で oral introduction を行い、生徒が英語に触れる場面が多くなるようにした。「聞くこと」の必要性をもたせるため、ワークシート(資料2)に、聞きとれた単語を書きとめさせた。生徒をペアにし、お互いに聞きとれた単語を合わせ、教科書の本文の概要を推測させ、日本語で書かせた。本文の内容を確認した後、もう一度同じ oral introduction を行い、正しく聞き取れなかった語や文を各自で確認させた。

<資料2>

Lesson2 THE MALDIVES, THE LAST PARADISE ON EARTH
Class [] No [] Name []

Part3
Before reading
< Let's try listening >

this afternoon, seawall
island, captain,
beautiful view,
almost
one of the flattest countries

メモをもとに本文の概要を覚え、ペアで互いに発表し合う。

モルディブが海の中に
消えてしまうかもしれない話。
(27日の午後
'マレ' 戻るボートの上での話。
潜水艇を見て
モルディブは平和な国のこと)

(ウ)活動Aに関する事例③ oral introduction その2

生徒は oral introduction に慣れてきたが、(イ)の活動では、聞きとれた単語を書きとめることに生徒が集中してしまうという課題があった。コミュニケーションを図るには、まず顔を合わせて、言葉のやりとりをすることが必要不可欠である。そこで、PCとプロジェクタを用い、スクリーンに本文に関する質問を映しながら、英語でやりとりをし、概要を把握させる活動を行った(資料3)。ペアワークとし、教師が質問を投げかけた後、ペアで相談をする時間を取ってから、指名するようにした。やりとりを増やすために、補足質問を多く取り入れた。最後には、地球温暖化のモルディブへの影響のスライドを提示し、地球温暖化の原因や影響について考えさせた。ワークシート(資料4)に、必要事項を生徒に記入させることで、活動の確認をした。

<資料3>

Let's think about global warming!

Why? → Because ...

What has happened around the world? → and so on

<資料4>

Lesson2 THE MALDIVES, THE LAST PARADISE ON EARTH

Class [] No [] Name []




Brainstorming

<About the Maldives>

Q1: What does 'the Maldives' mean in Sanskrit?
 ① 鳥々の花輪 ② 自然の宝庫 ③ 神々の住む国


Q2: How many people are there in the Maldives?
 ① about 100,000 ② about 300,000 ③ about 1,000,000

Q3: How large is the Maldives?
 ① 5 times larger than Zuzushima
 ② 1.2 times larger than Tokunoshima
 ③ 0.1 times larger than Saigoshima

Q4: Which is the national flag of the Maldives?
 ①  ②  ③ 

Q5: How many visitors from Japan visited the Maldives last year?
 ① about 5,500 ② about 14,000 ③ about 37,000

<Where is the Maldives?>



<Let's think about global warming!>

★What is the cause of global warming?
 ① 温室効果ガス (CO2) ② 森林破壊
 ③ 工業活動 ④ 自動車排気ガス

★What is happening in the world because of global warming?
 ① 氷河の融解 ② 海面上昇
 ③ 異常気象 ④ 生物多様性の減少

(エ) 活動Bに関する事例① 英問英答による内容理解

これまで、日本語で質問しながら内容を理解させていた。これを英語で実施することにしたが、英問英答は生徒にとっては難易度が高い活動なので、まずは、ペアワークで行った。教科書を開かせ、本文に沿って英語で内容を理解させるための質問をし、答えを本文中から抜き出させるようにした。教師の質問後、必ずペアで相談する時間を設けた。質問が終了したら、ワークシート(資料5)を配布し、英問英答の内容を書くことで確認させた。留意した点は、最後にワークシートにまとめることを生徒に伝え、まず本文から答えを見つけ出し、口頭で答えることに集中させるようにしたことである。

<資料5>

Lesson2 THE MALDIVES, THE LAST PARADISE ON EARTH

Part1

Comprehension

< Q&A >

Q1: What city is the capital of the Maldives?
 It is Male

Q2: What is his plan?
 His plan is to spend a week on the Maldives

Q3: How did he know about the Maldives?
 He know about it according to the website

Q4: Where is the Maldives located?
 It is located to the south of India.

Q5: How many islands does the Maldives consist of?
 It consists of about 1,200 islands.

Q6: What do visitors from around the world enjoy in the Maldives?
 They enjoy scuba diving, fishing, and so on.

Q7: What is the Maldives called?
 It is called last paradise on earth.

(オ) 活動Cに関する事例① 要約文

英語による表現力を身に付けさせるための活動として、英問英答によって本文の内容を理解させてから、key word をつなげて要約文を書く活動を行った。何度も音読をさせたり、リスニングによる穴埋めをさせたりして、本文を十分にインプットさせてから実施した。ワークシート(資料6)に、いくつかkey word を示しておき、それらをヒントにそのパートの要約文を書かせた。生徒の「書く」意欲を損ねないように、本文をそのまま再生する必要はないこと、簡単な英文で書いてよいことを事前に指示した。

<資料6>

After reading

< Story Reproduction >

Key word をつなげて part1の要約文を作ろう。

- over the Indian Ocean
- in one hour
- Male
- the Maldives
- My plan
- surf the Net
- to the south of India
- 1,200 islands
- scuba diving, fishing, and so on
- the last paradise on earth

① The Maldives consists of about 1,200 islands and is located to the south of India, whose capital is Male.

② People from all over the world come here to enjoy scuba diving, fishing, and so on.

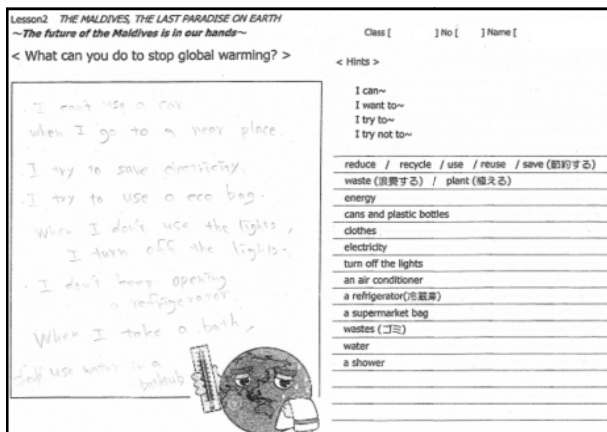
③ The Maldives is called the last paradise on earth because it is surrounded by beautiful nature.

good job!

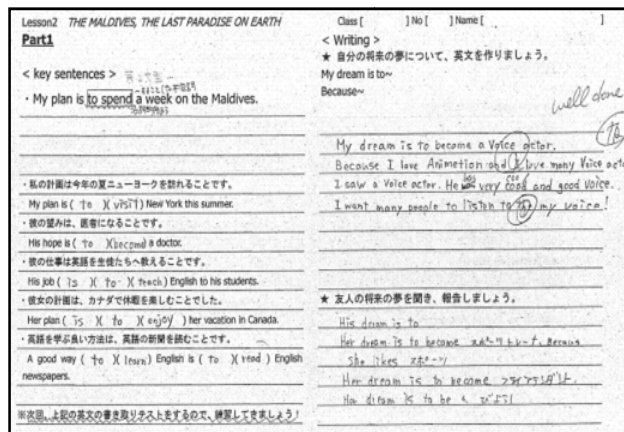
(カ) 活動Cに関する事例② 意見文

このレッスンでは、モルディブという国を通して、地球温暖化について学んだ。そこで、単元のまとめとして、このレッスンを通して作者は何を伝えたかったのか、地球温暖化を防ぐために自分たちができることは何か、などについて考えさせ、意見文を書かせた。生徒の現状をかんがみると、段階的な指導が必要であると考えたので、日本のCO₂排出量の部門別の推移、家庭部門の用途別内訳のグラフを資料として配布した。さらに、ワークシート(資料7)を配布し、ヒントとなる表現や語句を事前に提示した。ペアワークとし、表現などは相談させながら書かせた。最後に二つのペアでグループを作らせ、お互いに発表させた。

<資料7>



<資料8>



(キ)活動Cに関する事例③ 文法事項定着のための活動

本レッスンのパート1で扱う文法事項は不定詞の名詞的用法である。「文法はコミュニケーションを支えるものである」と新学習指導要領に明記されていることもあり、不定詞を用いた文章を書かせることでコミュニケーション活動へとつなげる工夫をした。まずはワークシート（資料8）を配布し、不定詞の練習問題に取り組み理解を図った。さらに、自分の将来の夢について書かせながら、名詞的用法に慣れさせた。その後、書いたことをペアワークでお互いに発表させ、その際、相手が言った内容を書きとめさせた。次は二つのペアでグループを作り、書きとめた英語をもとに、自分のペアの夢を別のペアに伝えるという活動を行った。

(ク)段階Iの研究内容の考察

生徒が苦手とする「聞く」「書く」活動を増やすことに留意しながら、導入・展開・まとめの各段階で様々な活動を実施した。また、これまであまり授業に取り入れていなかったペアワークやグループワークを多く取り入れた。

活動Aの新出単語や熟語の定着を図るための活動では、制限時間を設定したり、出題の順番を変えたりするなどの変化をもたせたことで、生徒はゲーム感覚で楽しみながら活動していた。この活動を実施するようになってから、大きな声で教科書の音読に取り組むようになった。oral introductionは二種類実施した。聞きとれた単語から概要を推測する活動は難易度が高く、理解度には個人差が大きかった。そこで、生徒の興味・関心を高めるための手段として、視覚教材を用いてのoral introductionを実施した。題材への関心が高まり、内容への理解度も高くなり、視覚に訴えることの効果の大きさを再認識した。

活動Bに関して英問英答を行ったが、順を追って本文から答えを抜き出せるような設問にしたため、正答率は非常に高かった。また、英問をワークシートに印刷しておき、答えを書きながら確認する時間を最後にとったため、英問英答の際は、生徒は答えを探すことに集中できていた。このことで、生徒は、「日本語訳をしなくても自分で英文から答えを見つけ出した」、「英語を英語のまま理解できた」という達成感をもつことができた。

活動Cに関しては、key wordを用いて要約文を書く活動は、活動の前にリスニングや音読など十分なインプットを与えたことで、習熟度の高い生徒は一定量の英文を書くことができた。一方、中にはほとんど書けない生徒も見られたことから、改善を要する活動であったと思われる。「地球温暖化」は、現代社会の授業で学んでいたこともあり、生徒には予備知識があった。多くの生徒が非常に前向きに取り組んでいた姿が印象的だった。ただ、意見文

を書くことはできても、それを相手に伝えることはまだ難しいようであった。到達目標ごとの考察は次の通りである。

活動Aの到達目標の達成状況

- ・ペアワークで、新出単語や熟語を、その意味から英語で答えることができた。
- ・ワークシートを工夫したり、視覚教材を用いたりすることで、oral introduction を聞いて、本文の概要をおおよそ推測することができた。

活動Bの到達目標の達成状況

- ・設問を工夫することで、英問英答によって内容を理解することができた。

活動Cの到達目標の達成状況

- ・key wordをつなげて要約文を書くことは、多くの生徒にとって難しい活動であった。
- ・地球温暖化を防ぐために、自分ができることを何とか英語で書くことはできたが、相手に理解してもらえるように発表することはできなかった。

(2) 段階Ⅱ（9、10月）

(ア) 段階Ⅰの考察に基づく工夫改善

これまでの取組を通して、教師の英語の発話量を増やすことで、生徒の「聞く」量は増えたが、生徒の英語の発話量は依然少なかった。段階Ⅱでは、イラストなど視覚教材を活用しながら、英語によるインプットをさらに増やすと同時に、様々な形で生徒のアウトプットの機会を増やす必要があった。

導入に関しては、英語と日本語の変換でなく、新出単語を英語のまま理解する活動に発展させることにした。内容理解に関しては、段階Ⅰでは、英語での oral introduction に慣れさせるため、情報を与えすぎてしまっていた。本文の内容に関してどこまで情報を与えるかを工夫改善する必要があった。また、内容の定着のために、自分たちで英語での T/F Question を作成させ、ペアワークで確認させる活動を実施することにした。表現活動に関しては、生徒の能力や意欲に差がみられるため、生徒の知的好奇心をかき立てるような資料の提供や、筆者の意図や気持ちを考えて、様々な異なる意見が出てくるような問題の提起の仕方について検討した。

段階Ⅱの到達目標

- | | |
|---------|--|
| 活動Aに関して | ・新出単語の意味を、英語で理解することができる。
・イラストを用いての oral introduction を聞いて、本文の概要を推測することができる。 |
| 活動Bに関して | ・英語での T/F Question を作成し、内容を理解することができる。
・各パートから文章を抜き出すことで、筆者の感情の変化を読み取ることができる。 |
| 活動Cに関して | ・本文に基づき、自分の経験を英語で書き、発表することができる。 |

使用教科書 POWWOW ENGLISH COURSE I Lesson4 A LUCKY MAN (文英堂)

(イ) 活動Aに関する事例④ 新出単語と英文のマッチング

ワークシート（資料9）を用いて、新出語句とその語句を説明している英文をマッチングさせた。ペアワークで話し合ってもよいが、辞書は使用せず、あくまでも意味を推測しながら組み合わせるように指示をした。最初は、単語の数と英文の数を同じにしたが、生徒が慣

れてきてからは、英文の数を何文か多くしたり、単語の数を何語か多くしたりした。答えを確認する際は、教師が英文を読み上げ、生徒が口頭で英単語を答えるという形式にした。

(ウ)活動Aに関する事例⑤ oral introduction その3

生徒は oral introduction に慣れてきた。視覚教材を活用することの有用性は段階 I でも明らかであったため、今回はイラストを用いることにした。ワークシート(資料 10)を配付し、教師の oral introduction を聞きながら、絵を並べ替えるという作業をさせた。ただ聞くのではなく、補足の質問を多く投げかけ、英語でのやりとりが多くなるような工夫をした。

(エ)活動Bに関する事例② T/F Question の作成

段階 I では、教師が T/F Question を作成し、生徒が答えるという形式であった。段階 II では、内容を確認するために、生徒自身に T/F Question を作成させた。ワークシート(資料 11)を配付し、まずは内容を理解させるために、教師が作成した英語での Q&A に答えさせた。次に、ワークシートの右側に T/F Question を作成させた。その後、ペアになり、自分の作成した T/F Question をお互いに出題させた。

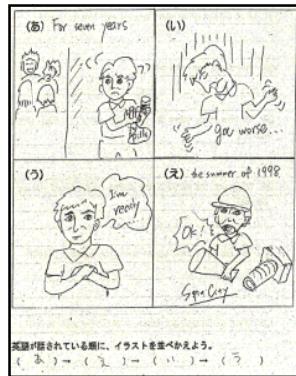
<資料 9>

<資料 10>

<資料 11>

Part3
Comprehension
<Word matching>

pill 錠剤	a feeling of being more calm, hopeful
treatment 治療	out of a building or room
comfort 安らぎ	to put or keep something in a place where it cannot be easily seen or found
hide 隠す	a method that is intended to cure an injury or illness
outside 外側	a small solid piece of medicine



Lesson: A LUCKY MAN
Class [] No [] Name [] < T&F >

< Q&A >

Q1: What did the writer carry around with him for years?
He carried P.D. meds around with him.

Q2: Why did he carry the pills?
He carried them to his decrease.

Q3: For how many years did the writer carry P.D. meds around with him?
He did for seven years.

Q4: What was the name of the drama he produced with other people?
It was Spineless.

Q5: Why did he become busier during the summer of 1998?
Because he was one of the winners at Spineless.

Q6: When his disease got worse, what did he begin to find?
He began to find that he was making his treatment of the world and his world.

自分で T/F を作り、となりの人に質問してもらおう。
1. During the summer, 1998, my new job suddenly made me a whole lot busier.
It was true for me to tell everyone. T & F

2. I was able to face myself seriously and think about my life deeply.
That's why I consider myself a lucky man. T & F

3. In 1998, I carried P.D. meds around with me.
T & F

提出した人 []
得点 3 / 3

(オ)活動Bに関する事例③ 心情把握のための文章の抜き出し

授業ではパートごとに「内容理解」をしている。レッスン全体を通しての筆者の心情の変化を確認させるため、各パートの中から、筆者の気持ちを最も表していると思う文を抜き出させ、それをつなぎ合わせることで、筆者の気持ちの変化を理解させた。はじめに各自で文章を抜き出させ、ワークシート(資料 12)に記入させた。その後、ペアにし、自分が抜き出した文章を、and, but, so などを用いてつなぎ合わせて口頭で相手に伝えさせた。選んだ文章が相手と違うならば、なぜそう考えたのか理由を話し合うように指示した。

<資料 12>

<One more try>
Part1 から Part4 の各パートから、筆者の気持ちを最も表していると思う部分を抜き出し、つなげてみよう。

Part1
For me, a 22-year-old lottery winner, money was no longer an object.

Part2
I don't think I felt anything.

Part3
I was time for me to tell everyone. I was ready.

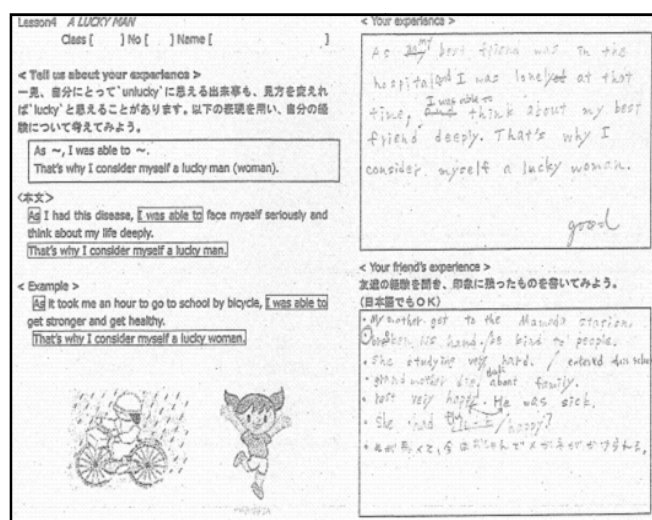
Part4
I was able to face myself seriously and think about my life deeply. That's why I consider myself a lucky man.

(カ)活動Cに関する事例④ 意見文

このレッスンは、物事は考え方や捉え方次第で、自分にとってラッキーにもアンラッキーにもなる、という内容であった。段階 I では、地球温暖化についての意見文を書かせたが、段階 II では、自分の体験を英文で書かせ、段階 I で課題であった「書いたことを相手に伝え

る」ことに留意した活動を行った。自分にとって「unlucky」と思える出来事でも、見方を
 変えれば「lucky」と思える自分の経験を英語で書かせた。ワークシート（資料13）に、本
 文中の表現を用いて書くように指示した。本文の中でMichael. J. Foxが、自らがパーキン
 ソン病にかかったことを、“As I had <資料13>

this disease, I was able to face
 myself seriously and think about my
 life deeply. That's why I consider
 myself a lucky man.”と表現する箇所
 がある。この“As ~, I was able to ~.
 That's why I consider myself a lucky
 man.”という表現を用いて書かせた。
 書いた文章はグループで発表させ、印
 象に残った文を書きとめさせ、書きと
 めた文章について意見交換させた。



(キ) 段階Ⅱの研究内容の考察

活動Aに関しては、二種類の活動を実施した。新出単語を日本語を介さずに英語で理解させる活動では、最初は、新出単語についての英語の説明を全て理解しようとして戸惑っている生徒も多かったが、徐々に、説明文の中の既習の単語から正解を導ける生徒が増え、正答率が上がってきた。内容に沿ってイラストを並べ替える活動は、生徒にとっては抵抗感がなく、概要の理解に効果的であった。その後の内容理解のための英問英答にもスムーズにつなげることができた。

活動Bに関しては、T/F Questionを生徒自身で作成させた。最初は、簡単な質問を作る生徒が多かったが、慣れてくると、わざと相手をひっかけるといった質問を作成するなどの工夫を凝らすようになった。またT/F Questionを作成するためには、本文を何度も読み直す必要があり、内容理解を深めることができた。また、本文から作者の気持ちを表す部分を抜き出させる活動は、抜き出すまでに時間はかかったものの、生徒は内容についてもう一度よく考え、作者の気持ちの変化を丁寧に考え直す機会になった。

活動Cに関しては、本文の表現を用いながら自分の経験を英文で表現させた。生徒が自信をもって発表できるように事前に教師が英文をチェックしたが、発表というよりは「読む」という生徒が多かった。しかし、友人の様々な経験や考え方を熱心に聞き、新たな「気付き」があったようだった。到達目標ごとの考察は次の通りである。

活動Aの到達目標の達成状況

- ・新出単語を説明した英文を読み、英語で理解することができた。
- ・oral introductionを聞いて、イラストを並べ替えながら本文の概要を推測することができた。

活動Bの到達目標の達成状況

- ・英語でのT/F Questionを作成し、内容を理解することができた。
- ・各パートから筆者の心情を表す文章を抜き出し、感情の変化を読み取ることができた。

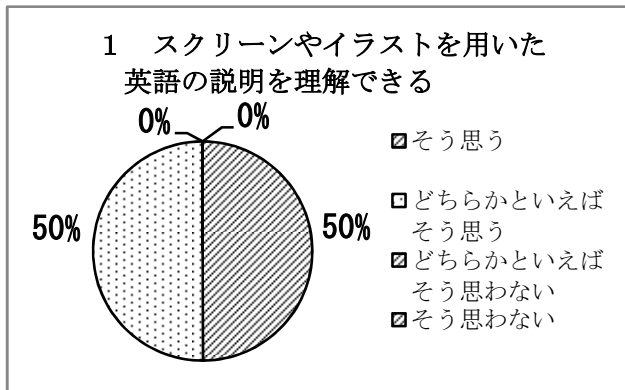
活動Cの到達目標の達成状況

- ・本文の表現を用いて、自分の経験を英語で書き、発表できた。発表方法に改善が必要である。

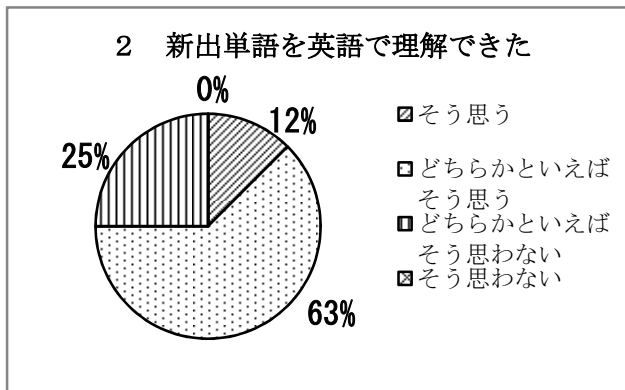
(3) 段階Ⅲ (11月)

(ア) 段階Ⅱの考察に基づく工夫改善

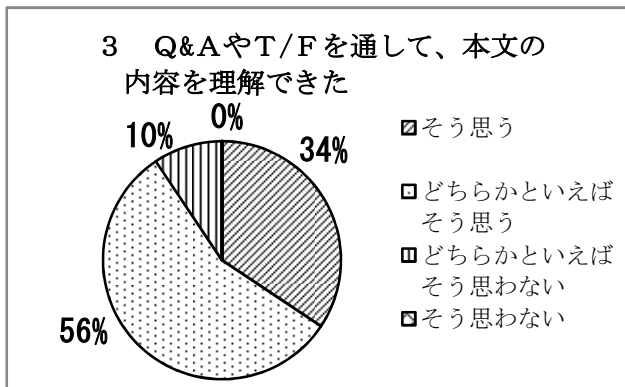
段階Ⅰ、段階Ⅱを終了したところで、生徒に授業アンケートを実施した。実施日は10月26日、5月に事前アンケートを実施したクラスと同じクラスの32名を対象にした。



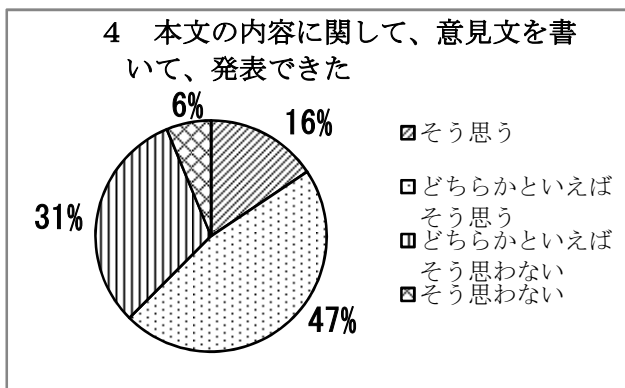
- 楽しくできた
- 想像力が高まった
- 分かりやすかった
- 単語の意味や英文が分からないところがあっても、イラストを見ることでその場面の状況が理解できた
- 画像があると記憶に残る



- 新出単語を別の表現でさらに深く学ぶことができた
- 少し難しかったけど、印象に残った
- 少しずつ理解できるようになった
- 難しいけれど、言い換えたことでその単語が覚えやすかった
- 少し難しかった
- 混乱した



- 英文のポイントになる所がよく分かった
- Q&AやT/Fを初めにやった方が分かりやすい
- 話の流れをつかむことができた
- 後から先生の説明もあるので分かりやすい
- 結構難しかった
- 詳しく読まないといけない



- ペアやグループで話し合うのは楽しい
- あまり意見を言うのは好きではないが、発表する時に考えさせられた
- 授業以外で、活動について友達と話し合ったりすることができた
- 男女が混じっている班だと話しにくい
- はっきり自分の意見を言えなかった
- 自分の表現力のなさを実感した

アンケート結果によると、自分の意見を発表し合う活動は、表現力や語彙力の不足のために抵抗を感じている生徒がいることが分かった。しかし、視覚教材を活用しての導入や、新出単語の英語での理解、Q&AやT/Fによる概要理解に関しては、生徒が概ね意欲的に取り組んでいることが分かった。これらの結果と、前述の「(キ)段階Ⅱの研究内容の考察」の

内容を踏まえて、さらに発展させた活動を実施することにした。特に留意する点は、生徒の英語の発話量を増加させることと、「相手が理解できるように伝える」ことを生徒に心がけさせることである。

段階Ⅲの到達目標

- 活動Aに関して ・新出単語を簡単な英語で説明することができる。
- 活動Bに関して ・英語でQ&Aを作成し、内容を理解することができる。
- ・イラストを用いて story reproduction をすることができる。
- ・パートごとに最も大切と思う文を抜き出し、その理由を発表し合うことができる。
- 活動Cに関して ・本文の続きを英語で考え、story telling をすることができる。

使用教科書 POWWOW ENGLISH COURSEⅠ Lesson5 RETURN TO THE WILD, MY AQUA (文英堂)

(イ) 活動Aに関する事例⑥ 新出単語の英語での説明

段階Ⅱでは、新出単語とその意味を表す英文をマッチングさせることで、単語を英語で理解させる活動を行った。生徒の中に「自分でもできそう」という様子が見られるようになったため、新出単語の意味を、簡単な英語で言い換えさせる活動に発展させた。ワークシート(資料14)を用いて、これまでにやってきた単語と英文のマッチングをさせた。その後、英語で説明文を書かせ、ワークシートを交換させ、お互いに単語を当てさせる活動を行った。語句の説明は、伝わりやすい表現を用いることを心がけさせ、説明できないときは、その語句の使用例を挙げるなどの工夫をするよう指示した。活動の最後には、英問英答の単語テスト(資料15)を行い、語彙の定着を図った。

<資料14>

<資料15>

(ウ) 活動Bに関する事例④ 英語でQ&Aの作成

中間アンケートから、英語で内容に関するT/F Questionを作成することに生徒は前向きに取り組んでいることが分かった。また、作成する質問も工夫が凝らされるようになってきた。そこで、少しレベルを上げ、ワークシート(資料16)を用いて、内容に関して英語でQ&Aを作成させることにした。これまで、教師の英語の質問に対して、生徒が英語で答えるという活動を継続

<資料16>

して実施してきた。それを自分たちで考えさせるという活動である。本文から答えがすぐに抜き出せる質問や、深く考えないと答えが出ない質問など、出題にはバリエーションをもたせるよう指導した。作成した質問は、ペアで口頭で英問英答させてから、答えをお互いに書かせ、それを出题者が添削するという形式にした。さらに、いくつかの質問を教師が選び、次時の復習の時間にクラス全体で英問英答をした。

(エ) 活動Bに関する事例⑤ key sentenceの抜き出しと理由付け

段階Ⅱでは、筆者の心情の変化を理解するために、カギとなる文章を抜き出すという活動を実施した。抜き出した文章をペアで確認させたところ、異なる文章を抜き出した際、「何でこの文にしたの？」などと質問し合っている様子がみられた。そこで、内容理解と表現活動を組合せた活動を実施した。まずは、ワークシート（資料17）を配付し、自分が本文中で最も大切と思う箇所をパートごとに抜き出させ、そこを選んだ理由を英語で書かせた。英語で表現できないときには日本語を使用してもよいとしたため、ほとんどの生徒が日本語で書いていた。その後4人のグループにさせ、お互いに発表させた。

<資料17>

Lesson5 RETURN TO THE WILD, MY AQUA	
Class [] No [] Name []	
Part1 <Think about more deeply> Part1からPart1の各パートから、最も大切と思う部分抜き出し、その理由も書かす。 Part1 This was just my first encounter with seals. I have been watching them since then. <理由> アキラとアキラの最初の出会いの場面であり、これからアキラの成長について様子が描くことを書いているから。	Part3 She might leave us once she felt the water of her natural home around her. <理由> アキラがアキラの自然の居場所を覚えて、アキラが海に帰っていくから。
Part2 Aqua wasn't able to make any sound for the first week, but her voice gradually came back. <理由> アキラの成長が戻ったところから回復して、成長していく様子が書かれているから。	Part2 My Aqua had returned to the wild. <理由> アキラがアキラの自然の居場所を覚えて、アキラが野生へと戻ることから。

(オ) 活動Bに関する事例⑥ 内容定着のための story reproduction

段階Ⅱより、継続してイラストを用いたoral introductionを実施してきた。慣れてきたせいか、生徒たちから「自分もやってみたい」という声がかきこえるようになってきた。導入として活動させるのは難易度が高いので、学習内容を確認させる活動として、ペアでイラストを用いてstory reproductionをさせた。本文の流れに沿って4枚の絵をワークシート（資料18）に描かせ、それを説明するための英文を考えさせた。教科書の文をそのまま書く生徒もいたが、これまで教師がやってきたように、少し易しい英語で言い換えている生徒もいた。相談しながらできるよう、ペアワークにした。その後、別のペアとお互いにstory reproductionをさせた。

<資料18>

本文の流れに沿って、イラストを描いてみよう。

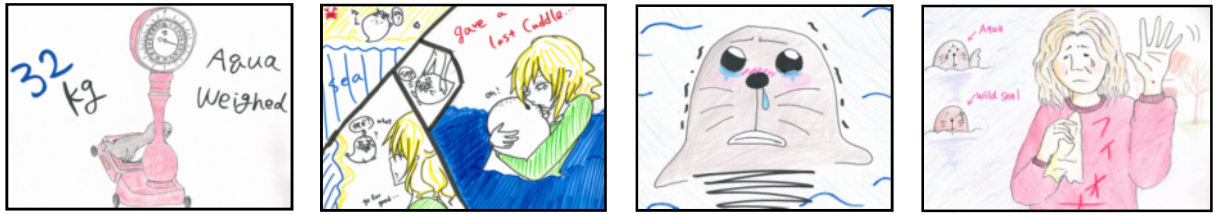
(あ) 23 ~ somewhere near me 	(い) 24 ~ into the sea
(う) 27 The seal ~ curiosity 	(え) 28 He ~ to...

(カ) 活動Cに関する事例⑤ story telling

このレッスンはアザラシの保護活動をしているスコットランドの女性の話で、レッスンの最後には保護したアザラシが野生に戻っていくという内容である。そこで、このときアザラシはどのように思ったか、この女性はどのように思ったか、アザラシはこの後どうなったのかなど、この話の続きを英語で考えさせる活動を、グループワークとして実施した。自分たちで考えた続きの話をワークシート（資料19）に記入させた。Then Aqua said to me, “-----”とアザラシ(Aqua)の気持ちを表すセリフを加えることを条件とした。(エ) 活動Bに関する事

例⑤と同様に、パート4をイラスト（資料20）を用いて story reproduction させ、それに続けて作成した物語をクラスで発表させた。

<資料20>



<資料19> 生徒が考えた続きの話と絵

Let's try "Story Telling"! Part 4 の続きを書いてみよう!

Then Aqua turned around and said to me." I will never forget you. You are my mother." I felt very very lonely. but I understood this is the best choice for Aqua and me. A year later, one day, I played my violin on the shore. Then I saw two seals and a baby seal. Immediately I understood it is "my Aqua". She came to see me with her family.



(キ) 段階Ⅲの研究内容の考察

段階Ⅲでは、英語で相手に伝えること、相手の話す英語を理解すること、つまり生徒同士での英語のやりとりの場面を増加させることに留意して活動を行った。

活動Aに関する新出単語の意味を簡単な英語で言い換える活動では、単語を相手に当てさせるというクイズ形式にしたことで、生徒は活動に意欲的に取り組んでいた。この活動をきっかけに英英辞典に興味をもつ生徒も出てきた。また、英問英答による新出単語テストも、語彙の定着に効果がみられた。

活動Bに関しては、段階Ⅱから始めた Yes/No で答える質問から、徐々にレベルを上げ、疑問詞を用いて疑問文を作成させた。これまで教師が継続して行ってきた活動であったため、あまり抵抗なく取り組んでいた。自分で疑問文を作らせることで、語順について改めて意識させることができた。また、story reproduction でも、教師が継続して oral introduction の形でモデルを示していたため、真似をしながら積極的に取り組んでいた。最も大切だと思う箇所を抜き出すと同時にその部分を抜き出した理由を書くことで、アザラシを保護して強い絆を築きながらも、最後にアザラシを野生へ戻す筆者の気持ちの変化を把握することができた。しかし、ほとんどの生徒が理由を日本語で書いていたことから、段階的指導が不足していたと考えられる。

活動Cの、別れの時の気持ちや話の続きを考えさせる活動では、何度も教科書を読み直したり、グループで話し合ったりしていた。内容理解を深めさせながら、英語での表現力を付けさせることができた。発表も「相手に伝わるように」ということを意識してできるようになった。到達目標ごとの考察は以下の通りである。

活動Aの到達目標の達成状況

- ・新出単語を英語で説明することができた。

活動Bの到達目標の達成状況

- ・英語でQ&Aを作成し、内容を理解することができた。
- ・イラストを用いながら、story reproduction をすることができた。
- ・パートごとに最も大切と思う文を抜き出すことができたが、その理由を相手に伝えることに関しては、ほとんどの生徒は日本語になってしまった。

活動Cの到達目標の達成状況

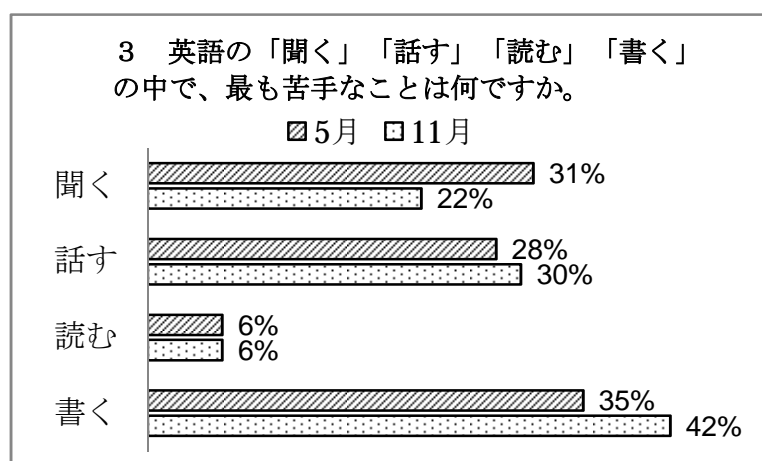
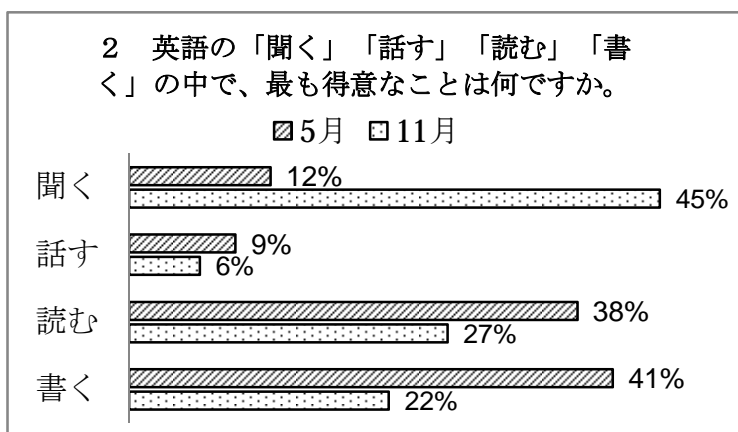
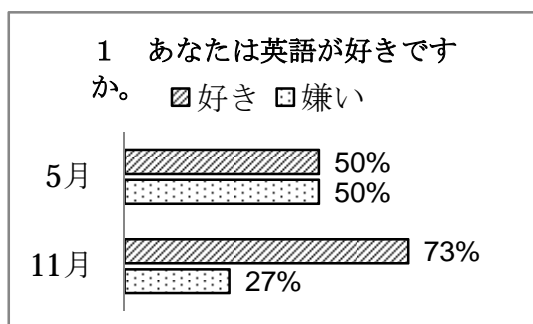
- ・本文の続きを英語で考え、story telling をすることができた。

5 検証とまとめ

(1) 事後アンケートによる検証

これまでの活動を振り返るために、同じ生徒 32 名を対象に、事前アンケートと同じ内容のアンケートを実施した。

<実施したアンケート>



4 英語を「聞く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。

- ・話されていることを頭の中で速く整理して理解できるようになりたい。
- ・どんな内容が話されているのか概要を聞きとれるようになりたい。
- ・前置詞などが他の単語とくっついて読まれるのを聞きとれるようになりたい。

5 英語を「話す」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。

- ・話すことで、たくさんの人とコミュニケーションがとれるようになりたい。
- ・自分の思いや意見を相手に伝えることができるようになりたい。

6 英語を「読む」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。

- ・全ての英文が理解できなくても、理解できる部分をつなぎ合わせて内容を理解できるようになりたい。
- ・読むスピードを速くしたい。
- ・英語の新聞や本を読めるようになりたい。

7 英語を「書く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。

- ・きちんとした構成の英文を書けるようになりたい。
- ・自分の思いが相手に通じるような英文が書けるようになりたい。

「聞くこと」を得意とする生徒が増えた。「聞く」活動を増やしたことが背景にあると考えられる。また、段階的に、「相手が伝えたいことを理解する」ことを目的とした活動を行ったことで、生徒の中にも相手のことを理解したいという気持ちが強くなったためと考えられる。反面、「話すこと」や「書くこと」などのアウトプットを苦手とする生徒が増えてしまった。アウトプットの場面を増やしたことで、その難しさを実感したり、自分の英語力不足を感じたりしたためだと考えられる。しかし、問5や問7の回答からも、どうしたら思いを伝えられるようになるのか、具体的な方法を生徒が意識するようになったことが分かる。自由記述の回答は全体的に事前アンケートと比較してより具体的になり、できるようになるためには何をすればよいのか、ということを生徒が意識するようになったことが分かる。

(2)まとめ

「生徒が英語に触れる機会をいかに増やすか」「英語を英語のまま理解したり、英語で自己表現したりするコミュニケーションの場面をいかに作るか」に焦点をあて、様々な実践を行ってきた。研究当初に設定した仮説1から3については、概ね検証できたと考えている。

今回の研究で最も留意した点は、段階的指導である。研究内容は、授業の導入に関する活動、内容理解に関する活動、教科書をもとにした表現活動の三つに分類した。「授業をコミュニケーションの場面である」と捉えるためには、英語でのやりとりが必要不可欠である。つまり、自分の思いや意見を英語で相手に伝えたり、相手が英語で伝えようとしていることを理解したりする、ことが求められるが、これらは生徒にとって難易度は高い。今回は、まずは、「読んだ内容に対して自分の意見をもつ」ことからの指導であった。また、英語でアウトプットさせるためには、多量のインプット、インテイクが必要とされるため、様々な場面を設定し、アウトプットに無理なくつながるような活動を実施した。例えば、教師と生徒とのやりとりを十分に行ってから、生徒同士でのやりとりに段階的に移行させるなどした。

この実践を通して気付いたことは、①生徒は教師の英語での説明に思ったほど抵抗感がないこと、②映像やイラストなどの視覚的教材が生徒の内容理解に大変効果的であること、③ペアワークやグループワークを取り入れることで、生徒に自主性や学び合いが生まれること、④発表させることで、他の生徒の意見や体験に興味をもって耳を傾けることができ、生徒間で新たな発見や気づきが生まれること、である。

段階的な指導を心がけながら、様々な活動を継続して実施することで、生徒に有能感を味わわせるようにしたり、関心・意欲を刺激したりするような指導を行ってきた。実践を通して、改めて生徒たちの中にある大きな可能性と秘めた能力に気付いた。生徒たちの英語運用能力を高めるために、教師としてこれからも努力し続けたいと考えている。

1 課題設定の理由

新学習指導要領では、「英語の授業を実際のコミュニケーションの場とするため、英語の授業は基本的に英語で行う」と明記されている。高等学校での英語の授業では、教科書の本文の意味を理解させることが授業の主な目的になっていることが多いため、日本語での本文説明に大半の時間が割かれる場合も多い。授業がそれだけに終始しては、生徒のコミュニケーション能力を育成することはできない。日々の英語の授業において、教師と生徒が、または生徒同士が英語でのインタラクションを図る場面が少ない現状を考慮すると、英語でのインタラクションをいかに増やしていくかが重要であると考えている。本研究では、現在指導している英語Ⅱにおいて、授業を英語でのコミュニケーションの場と捉え、英語でのインタラクションを増やすにはどのような方法があるのか、生徒が英語で「相手の考えや情報を理解し、自分の意見を伝える」ことができる能力を伸長するためにはどのような方法があるのか、を研究することにした。

2 生徒の実態及び仮説の設定

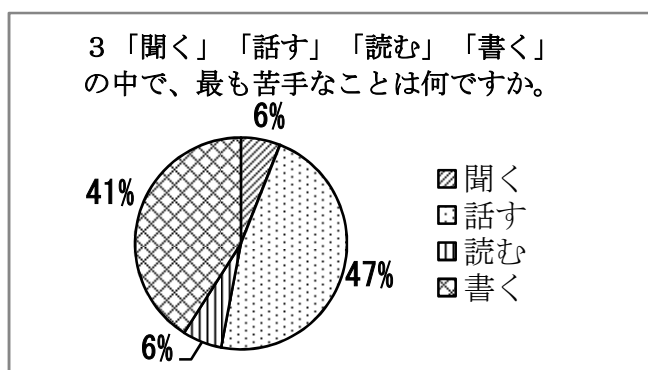
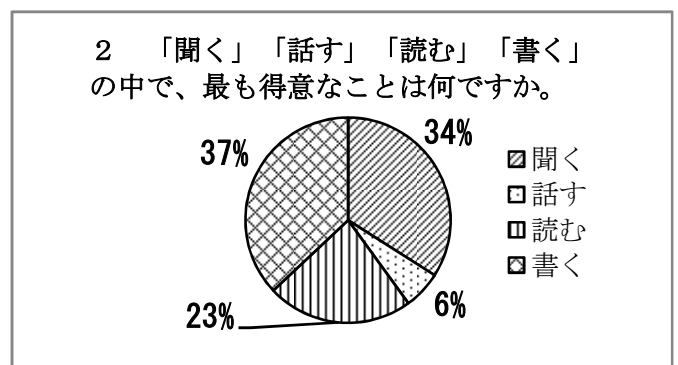
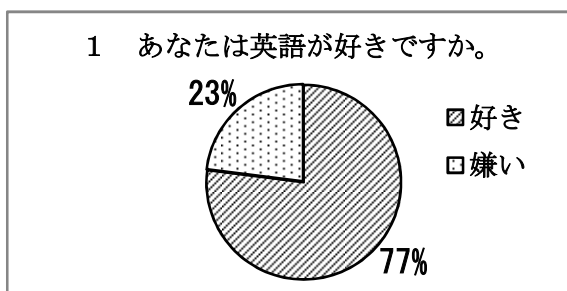
(1) 事前アンケート

平成 22 年 5 月に英語学習に対する意識を調査するために、以下のようなアンケートを実施した。今回のアンケートの調査対象とした生徒は「人文国際コース」の 2 年生で、外国語の科目を 11 単位履修している。「英語Ⅱ」は 4 単位の履修となる。

<実施したアンケート> 対象：2 年（人文国際コース） 35 名

- 1 あなたは英語が好きですか。
- 2 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も得意なこと何ですか。
- 3 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も苦手なこと何ですか。
- 4 英語を「聞く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
- 5 英語を「話す」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
- 6 英語を「読む」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
- 7 英語を「書く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。

<アンケート結果>



<以下は主なものを抜粋>

- 4 英語を「聞く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・長い会話文の内容をきちんと聞き取れるようになりたい。
 - ・相手が言ったことがすぐに分かるようになりたい。
- 5 英語を「話す」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・自分が伝えたいことを瞬時に英語で伝えたい。
 - ・外国の人とスムーズに話せるようになりたい。
- 6 英語を「読む」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・英語を日本語にいちいち訳さないで、英語で理解したい。
 - ・分からない単語があっても、それにつかえずに読めるようになりたい。
- 7 英語を「書く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・文法をきちんと使って正しい文が書けるようになりたい。
 - ・自分が伝えたいことを文章で伝えることができるようになりたい。

アンケートの集計結果をみると、人文国際コースを選択している生徒でもあるので、約8割の生徒が英語を「好き」と回答している。「聞くこと」や「書くこと」を得意としていることが分かるが、これは、週に11時間英語に関する科目を履修し、ALTとのTTなど、授業中に英語を聞く場面が多いことが理由として考えられる。一方、「書くこと」に関して苦手意識をもっている生徒が多い。文法を正確に使えるようになりたい、自分の思っていることを書けるようになりたいと考える生徒が多いため、自分の目指す姿に近づけないことが苦手意識をもつ原因になっているのではないかと考えられる。

(2) 事前アンケートに基づく仮説

アンケートの集計結果から、以下の仮説を立てた。

仮説1

英語を「聞くこと」が得意という生徒が多い。教師が授業中に様々な英語を話すことで、英語のインプット量を増やせば、生徒は相手の考えや情報が理解できるようになる。さらに、英語によるコミュニケーションへの興味・関心が高まる。

仮説2

生徒が得意と感じている「聞くこと」「書くこと」を中心とした英語での言語活動を日々の授業に効果的に取り入れることで、英語でのインタラクションが増え、英語で「相手の考えや情報を理解し、自分の意見を伝える」ことができる能力が伸長する。

3 本研究の流れ

本研究では、以下のABCの三つの活動を、3段階に分けて実施した。段階Ⅰ（6、7月）では教師からのインプット量を増やすこと、段階Ⅱ（9月）では教師と生徒の英語でのインタラクションを増やすこと、段階Ⅲ（10月）では生徒同士の英語でのインタラクションを増やすこと、を全体の目標とした。

<活動内容>

活動A	内容理解に関する活動
活動B	表現に関する活動
活動C	その他の活動

<具体的な実施内容>

活動 段階	活動A	活動B	活動C
I (6、7月)		Rows and Columns の工夫 事例①	Classroom English の工夫そ の1 事例①
II (9月)	ワークシートを用いての 英問英答 事例①	内容に対しての意見文を書く 活動 事例②	Classroom English の工夫そ の2 事例②
III (10月)	英問英答 事例②	内容に関するディベート 事例③	

4 実施内容

(1) 段階 I 「教師からの英語のインプット量を増やす工夫」

段階 I の到達目標

- 活動Bに関して ・英語でのウォームアップ活動を通して、授業への興味・関心を高めることができる。
- 活動Cに関して ・教師による英語の指示に従い、適切に活動することができる。

(ア) 活動Bに関する事例① Rows and Columns の実施 (ウォームアップの工夫)

これは中学校でも行われている簡単なゲームである。前時での学習内容を確認するための活動として授業の最初にウォームアップとして行った。最初は下記のような手順で教師の質問に生徒が英語で答えるという形式で行った。徐々に実施方法を工夫し、教師が生徒の答えに対して補足の質問をしたり、着席している生徒に関連する質問を投げかけたりと、英語でのインタラクションをとるようにし、生徒全体が英語を聞かなければならない場面をなるべく多く設定した。

質問する内容に関しては、最初は天気や日時などを質問したが、それらは生徒が興味・関心をもつ内容ではなかったため、積極的に取り組まなかった。そこで、今までに学んだ単語、教科書の既習事項に関する質問、新聞・テレビで話題になっていることなどを質問するようにした。

—指導手順—

- ア) 全員起立させる。
- イ) 教師が英語で何か質問をする。
- ウ) 答えが分かった生徒に手を挙げさせる。教師が指名し、答えさせる。
- エ) 正解ならば、教師が“row or column?”と尋ね、答えた生徒にどちらかを選ばせる。
- オ) 選んだ列 (row なら横列、column なら縦列) の生徒を着席させる。
- カ) 一列残ったら、一人ずつ質問する。答えることができたなら着席させる。

—実施例—

Teacher : Let's play rows and columns. How do you say "jou-hou" in English?

Student : It is "information."

Teacher : That's right. Row or column?

Student : Row.

Teacher : O.K. Students in this row can sit down. Let's move on to the next question.

(イ) 活動Cに関する事例① classroom English の工夫 その1

教師が英語を発話しない授業では、生徒が英語を話す雰囲気は作り出せないし、生徒の英語に対する興味・関心を引き出すことはできない。生徒への英語のインプットを多くするた

め、さらに、英語を話すモデルになるために、教師が積極的に英語を話すようにした。最初は、それまでの授業の指導手順は大きくは変えずに、授業中の指示を英語で行った。生徒の様子を見ながら、徐々に使用する英語を増やしたり、表現のレベルを上げたりした。また、一方的に教師が英語を話すのではなく、なるべく英語でのやりとりをするようにした。以下に示す表現は、毎回の授業で必ず使った基本的な表現である。

- How are you, today? / What's up?
- Open your textbook to page～.
- Let's review the last lesson.
- I will read it aloud, so please listen to me and follow along.
- New words. Repeat after me,(please).
- Let's check the meaning of the new words in Japanese.
- I will ask you some questions in English/Japanese, so please answer them in English / Japanese.
- How do you say “～” in English?/How do you say “～” in Japanese?
- I will give you five minutes to ～. O.K. ready, go!
- Let's check the answers.
- Please speak up.
- Please say it again.
- Now let's read together. Repeat after me.
- Now time's up. That's all for today. See you next time. Good bye.

(ウ)段階Ⅰの研究内容の考察

6月から7月にかけて、授業の指示はほとんど英語で行った。最初は「日本語の方がいい」などと言う生徒もいたが、基本的な表現を繰り返し使用することで、生徒も徐々に日本語なしの授業進行に慣れてきた。少しずつ使用する英単語のレベルを上げたり、単文ではなく複文や重文を用いたりして、生徒に聞かせる英語の量だけではなく質も上げていった。生徒が教師の言う英語をまねるようになり、毎回同じ英語を使用したので、教師が言うべき指示を教師より生徒が先に英語で言う場面などもみられるようになった。

また、「**Rows and Columns**」を実施することで、生徒が英語に触れたり英語でやりとりをしたりする機会を増やすことができた。生徒は日本語で質問されるより、英語で質問される方が一生懸命に聞こうとする態度が見られた。また、教師からの一方的な質問で終わらないように、他の生徒に補足の質問をしたり、生徒からの質問を促したりする工夫もした。授業中の視線やうなずきなどの生徒の態度から、教師の英語が理解できる生徒が増えたようだった。英語でウォームアップをするようになったり、授業中に英語を使用しやすい雰囲気を作ることができた。到達目標ごとの考察は次の通りである。

活動Bの到達目標の達成状況

- 教師からの一方的な質問でなく、他の生徒に補足の質問をしたり、生徒からの質問を促したりする工夫もしたので、生徒の発話の機会も少しずつ増やすことができた。生徒が興味をもつような質問内容を工夫することで、生徒が積極的に挙手をし、自発的に参加するようになった。

活動Cの到達目標の達成状況

- 教師の英語の指示を正確に理解して活動できる生徒が多くなった。また、少し難しい表現を用いても内容を推測して指示に従える生徒も増えていった。しかし、他の先生方に授業を参観していただいたときに、指示とは異なることをしている生徒がいたと指摘を受けた。さらに生徒をよく観察し、生徒の実情にあわせた英語での指示をするようにしなければならない。

(2) 段階Ⅱ「教師と生徒の英語でのインタラクションを増やす工夫」

(ア) 段階Ⅰ（6、7月）の考察に基づく工夫改善

段階Ⅰでは、主に、授業中に教師が積極的に英語を使用することによって、生徒への英語のインプット量を増やすことと、生徒が授業への興味・関心をもつようなウォームアップ活動を工夫することを実施してきた。多くの生徒は、英語を聞きとることや、やりとりをすることに抵抗感はなくなってきた。しかし、段階Ⅰでは、授業の多くの時間を割く教科書の内容理解の部分に関しては、英語より日本語を使用する割合の方がずっと高かった。

そこで段階Ⅱでは、教師と生徒の英語でのインタラクションを増やしていくことに留意しながら、本文の内容理解を英語で行うにはどのような方法があるかを研究することにした。具体的には、パートごとにワークシートを作成して、英問英答を行うことを中心に研究を進めていくこととした。事前アンケートからも分かるように、「書くこと」「聞くこと」が得意であると感じている生徒も多いが、「書くこと」「話すこと」を苦手とする生徒も多い。そこで、教科書を読んで、ワークシートの英問の答えを英語で書き、それを答えるという形式から始めることとした。「話すこと」が苦手と感じる生徒に、教師の英問に、即座に口頭で英答させるのは難しいと考えたからである。新学習指導要領で、外国語科の必修修科目になる「コミュニケーション英語Ⅰ」の「2 内容のエ」に、「聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く」という項目がある。そこで、ワークシートの最後には、本文を読んで考えたことや感じたことを「書く」作業を取り入れ、それを相手に伝える活動を行うこととした。

段階Ⅱの到達目標

- | | |
|---------|---|
| 活動Aに関して | ・英問英答を通して、教科書の本文から必要な情報を探し、正確に英文を書き、それらを口頭で答えることができる。 |
| 活動Bに関して | ・英文を読んで自分の意見や感想を書き、それを相手に伝えることができる。 |
| 活動Cに関して | ・英語での説明を聞いて、内容を理解することができる。 |

使用教科書 MAINSTREAM II Lesson 4 *Visas for Life* (増進堂)

(イ) 活動Aに関する事例① ワークシートによる英問英答を取り入れた授業 その1

これまで実施していたQ&Aや、英語による内容理解のためのT/F Questionを改善し、内容理解が深まるようにした。英問英答の答えとなる文章は、本文を読み解くためのkey sentenceとなるものにし、それをつなぎ合わせれば本文のsummaryとなるように工夫した。また、英語でのインタラクションを多く図れるよう、問い方を変えて何度も生徒に質問を投げかけたり、補足の質問をつけ加えたりした。

—基本的な指導手順—

- ア) 新出単語を確認する。
- イ) 本文の内容を理解させるために、日本語でのQ&Aや、英語でのT/F Questionを行う。
- ウ) ワークシート(資料1)を配布し、英語の質問に答えさせる。
- エ) ペアで答えを確認させる。教師が質問を読み、それに続いてペアごとにOne, two…で一緒に答えを読ませる。読んだ文が同じでない質問があれば、ペアで再考させる。

例 Teacher : Q1. What was Sugihara Chiune's job?

Students : (together) One, two, "He was the Japanese consul to Lithuania."

- オ) すべての質問が終わったら時間をとり、必要に応じて答えを再考させる時間をとる。
- カ) 生徒に質問を読ませ、教師が模範解答を読む。必要があれば板書する。
- キ) 英答を参考に、本文を読み解くためkey sentenceがどこにあるかを教科書で確認させる。

<資料1>

2. Questions & Answers

Q1. What did the people in the crowd look like?
 Faces in the crowd were intense and tired out.

Q2. Why did the Jewish refugees need transit visas?
 Because they can get to free countries.
 In order to
 V 行くために(目的)V

Q3. What did the refugees think would happen, if Mr. Sugihara did not help them.
 If he didn't help them, they will be killed by the Nazis.
 They thought that they would be killed by the Nazis.

Q4. When did the Sugihara family's life changed?
 July 18, 1940

4. p47の最後に"the Sugiura family's life changed dramatically"とありますが、どう変わってしまったのだと思いますか。日本語でいいので想像して書いてみよう。
 辞書たちを調べるために全て取り組み、寝る暇もなくなりました。

Lesson 4 Visas for Life part2 (p48)

2年()組()番 氏名()

1. New Words.

2. Questions & Answers

Q1. Why did Mr. Sugihara send telegrams to the Foreign Ministry?
 Because for permission to issue visa to the refugees.
 He sent telegrams.

Q2. How many times did he send telegrams?
 Three times.
 He sent telegrams.

Q3. What did Mr. Sugihara get from the Foreign Ministry in Tokyo?
 He discussed the situation with his wife and children.
 He got negative response.

Q4. Why was it difficult for Sugihara to decide to issue the visas?
 Because he was bound by the traditional Japanese obedience, he had been taught all his life.

Q5. What did Sugihara think would happen to him if he issued the visas?
 If he refused the orders of his superiors, he would be fired and his family would suffer great financial difficulty.
 He thought he would be fired.

Q6. What did Sugihara do at last?
 He decided to issue the visas.
 At last

4. p48の英文を読んで、杉原さんの決断に対してどう思いますか。また、この後、杉原さん(一家)はどうなってしまうと思いますか。日本語でいいので想像して書いてみよう。
 困っている人を、自分や家族と犠牲にまで助けようとする事は素晴らしいと思うが、家族は苦しくなると思う。

(ウ)活動Bに関する事例② 内容についての意見文を書く活動

本文の内容を理解して終わりではなく、自分が感じたことや考えたことを文章で表現させる活動を行った。最初に英語で意見文を書かせてみたが、非常に時間がかかった。また、生徒は、語彙力や表現力の問題もあり、思うように英文を書けず、生徒の「書く」意欲はあまり高まらなかった。また、日本語の単語を一語ずつ辞書で英訳し、それらを並べて英文を作る生徒も多く、完成した英文は、英語としては意味が通じないものも見られた。

最終的な目標は、自分の意見を英語で伝えられるようになることである。しかし、実情を考えると、まずは本文の内容について「考える」ことが重要であると考え、なぜ登場人物はそうしたのか、自分だったらどうするかなど、さまざまな視点から考えさせた。そして、考えたことを文章で表現することへの意欲を高めるため、日本語を用いてもよいこととした。また、文章だけで自分の思いを相手に伝えるのは難しいと感じる生徒もいるため、伝えるための補助手段として絵を描かせた。英文を読んで印象に残った場面を描かせたり、本文の流れを絵で表させたりした。(資料2)

最後に、4人グループになり、絵を用いながら自分の意見を他の生徒に伝える活動を行った。留意したことは、情報の一方的な伝達にならないように、話し手は聞き手が理解できるように考えて伝えさせることと、聞き手は話し手の意見に対して必ずコメントをさせることである。

<資料2> *原文のまま

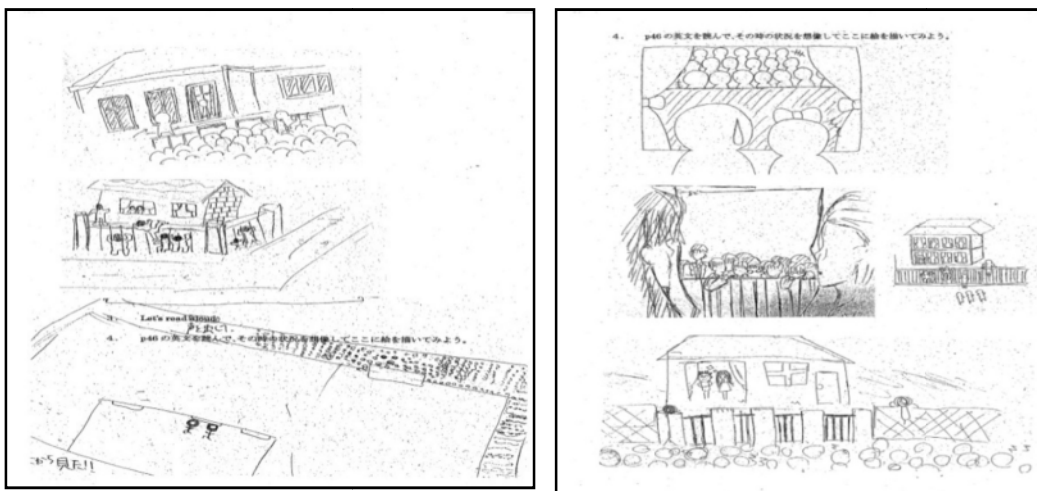
生徒が書いた意見の例 (日本語のみ)

私は杉原さんにはなれないと思う。人の役に立つことをしたいと思うけど、それをする勇気がない。それから、いざというときは、自分や家族を犠牲にしてまで他人のために何かをするなんてできないと思う。自分や家族のことを一番に考えてしまうと思う。この間、テレビで患者さんのために家族との時間を削って仕事をしている医者のお話を観た。その時も自分にはできないと思った。たぶんその人が冷感で押しかけたら、逃げちゃうかもしれない。どうしたら、こんなに他人のことを一生懸命考えられる人になれるのかな。その答えは、自分で頑張ってみようかな。

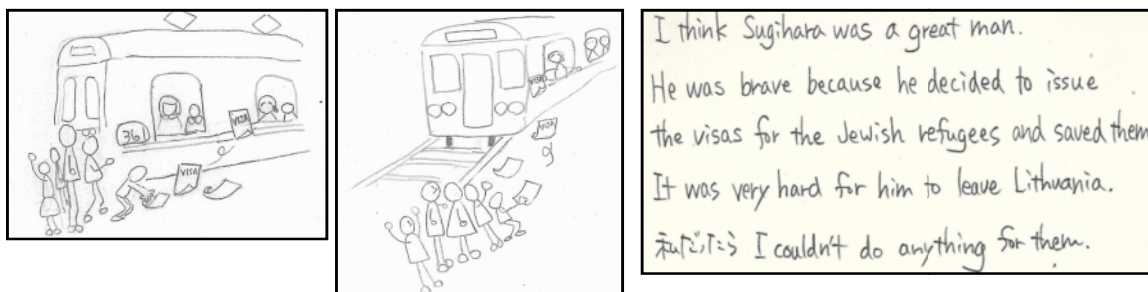
生徒が書いた意見の例 (英語と日本語)

I think Sugihara is great. But, if he is my father, I feel lonely.
 I think ... 人はほめてもらった、認めてもらった、りたくていいことをするのは、自分が人のためになりたいから何かをするということの大切さを感じた。先生が「自分の役に正直に生きる」とはどういうことか、聞いてみたけど、できそうとできない難しいことだと思ふ。It's too difficult.

生徒が描いた絵 (パート1)



生徒が描いた絵と意見文 (パート4)



(エ) 活動Cに関する事例② classroom English の工夫 その2

6月から、授業の指示はほとんど英語で行ってきたので、生徒は英語での指示に慣れ、理解できるようになった。そこで、使用する語彙を難しくしたり、表現を変えたりするようにして、さらなるインプットにつなげた。例えば、understand を recognize、make out などに、think を suppose などに言い換えた。言い換えた時は、その単語を何度か言い返したり、ゆっくり言ったりして、生徒の理解を促すようにした。

また、教師の small talk も行うようにした。ただ聞くだけでは飽きてしまうので、途中、何度も生徒に質問を投げかけるようにした。内容は生徒が興味をもつようなことや、社会的に話題になっていることなど、バリエーションを増やすよう心がけた。何回か実施し、生徒が small talk に慣れてきてからは、生徒同士での small talk を行った。文法的な間違いは気にせず、とにかく自分の考えや最近の出来事などを30秒で話すように指導した。聞き手は、必ず話の内容に関する質問をするというルールを設定したので、話し手の伝えようとすることを理解しようとする姿勢が見られた。

(オ) 段階Ⅱの研究内容の考察

英語で本文の内容を理解させるには以下のような方法が考えられる。

- (例)・教師が本文の内容をやさしい単語で言い換え、それを口頭で説明したり、絵などを用いて視覚的に理解させたりする。
- ・内容を理解できるようなT/F Questionを作成する。
- ・内容に関する英問英答をする。

事前アンケートで「書くこと」を得意とする生徒も多かったが苦手とする生徒も多かったこと、教師と生徒のインタラクションを増やしたかったこと、の二つの理由から、今回の研究では英問英答による内容理解の活動を行った。

1学期の期末テスト後から9月までの間、ワークシートを用いて英問英答を行った。ワー

クシートを有効に活用するために、授業の指導手順を改善したことで、英語を苦手とする生徒も、徐々にではあるが、自発的にワークシートに取り組むようになってきた。個々の作業の後、ペアでの答え合わせをするようにしたことや、ワークシートにある質問に答えていけば本文の重要な箇所が理解できるようにしたことなどが効果的であった。最後には「書くこと」と「話すこと」の統合的な指導を目指し、ペアで口頭での英問英答を行った。

最終的には、自分の意見を英語で伝えられるようになることが目標ではあるが、その目標に到達するまでの過程を次のような三つのステップで考えた。

STEP 1 英文を読み、その内容や背景、登場人物の心情について考える。

STEP 2 考えたことを文章で表現する。

STEP 3 相手が理解しやすいように自分の意見を伝える。

STEP 1 では、「考える」ことが重要であると考え、自分の意見を書く際に、日本語を用いてもよいとした。そうすることで、生徒は自分の意見を書くようになり、無回答の生徒はほとんどいなくなった。ただ、最初はすべて日本語で意見を書く生徒が半数以上であったので、短くてもいいので1文ずつでも英文を増やしていくように指導した。その結果、ほとんどの生徒が英語を交えた意見文を書くようになった。各活動の到達目標の考察は次の通りである。

活動Aの到達目標の達成状況

- ・ワークシートを用いての英問英答を行ったが、ある程度内容理解をしたあとに実施した活動だったので、生徒は意欲的に取り組んでいた。書いたものをもとに口頭での英問英答の練習をしたが、ただ自分のワークシートを読むだけになっている生徒も多かった。

活動Bの到達目標の達成状況

- ・日本語で書いてもよいということにしたので、生徒はいろいろと考え、自分の考えや思いをよく書いていた。様々な意見が書いてあり、生徒理解にも大いに役に立った。徐々に英語が増えてきてはいるものの、すべて英語でというところまでは指導できなかった。また、相手に伝えようという気持ちはあるものの、伝え方が身に付いていないので、「話して伝える」のではなく、「文を読んでみる」という状況になってしまった。

活動Cの到達目標

- ・使用する語彙のレベルを少しずつ上げながら、英語で授業を進めることができた。ただし、日本語の方が効果があると判断した時は、日本語で説明した。毎回同じ表現での指示ではなくなったので、生徒は教師の指示を注意して聞きいていた。**small talk** なども取り入れ、英語でのやりとりが自然に行われる環境ができた。

(3) 段階Ⅲ「生徒同士の英語でのインタラクションを増やす工夫」

(ア) 段階Ⅱ（9月）の考察に基づく工夫改善

段階Ⅱでは、教師と生徒の英語でのインタラクションを増やしていくことに留意しながら活動を実施した。生徒は少しずつではあるが英語で表現することができるようになってきた。また、英語で表現することに関心を示す生徒も増え、意欲的に取り組むようになった。しかし、英答するといっても、教科書の本文中にヒントがあり、生徒が答えを導きやすいように教師が意図的に作成した英問であった。また、ペアで口頭練習させたが、書いたものを読むだけになってしまい、コミュニケーション活動として十分とは言えなかった。

意見文を何度も書いたことで、自分の考えなどを書くことへの抵抗が減ってきた生徒も多くなり、書いたものを相手に伝えてみたい、理解してもらいたいという様子がうかがえるようになってきた。

これらを踏まえ、段階Ⅲでは、次の二つの活動を行うことにした。段階Ⅱではワークシートを用いて解答を書かせ、それを読むという形式の英問英答を行ってきたが、段階Ⅲでは、

ワークシートは用いるが、まず口頭で答えさせ、それを書かせるという形式に改善することにした。また、表現に関する活動として、簡単なディベートを行うことにした。自分の意見をまとめ、相手に伝わるように表現を工夫したり、相手の意見を聞きとってそれに対する自分の意見をまとめたりすることができるようになるためである。生徒同士のインタラクションが活発に図られるように指導を工夫した。

段階Ⅲの到達目標

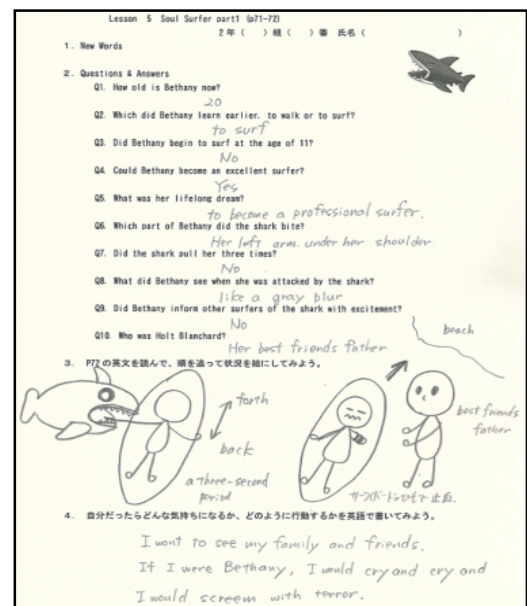
- 活動Bに関して ・英語での質問を聞いて、教科書の本文から必要な情報を探し、口頭で答えることができる。
- 活動Cに関して ・英語での簡単なディベートを通して、自分の意見を筋道を立てて表現したり、相手の意見を聞いて、それに賛成したり反対したりすることができる。

使用教科書 MAINSTREAM II Lesson 5 *Soul Surfer* (増進堂)

(イ) 活動Aに関する事② ワークシートによる英問英答を取り入れた授業 その2

段階Ⅱで授業に英問英答を取り入れたが、ワークシートに書かれている英問の答えを教科書の本文から探し出して書くという活動であった。生徒はこの形式での内容理解に慣れてきたため、段階Ⅲでは、口頭での英問英答を到達目標とした。ただし、この活動は生徒にとっては難易度が高いため、質問内容は徐々にレベルを上げるよう三つのステップにした。

<資料3>



—指導手順—

- ア) 新出単語を確認する。
- イ) 本文の内容を理解させるために、日本語での Q & A や、英語での T/F Question を行う。
- ウ) 教師が英語で質問を投げかけた後、ペアで答えを考えさせる時間をとる。
- エ) いくつかのペアを指名し、解答させ、答えを確認する。
- オ) すべての質問が終わったらワークシート（資料3）を配付し、正解を書かせる。
- カ) 英答を参考に、本文を読み解くため Key Sentence を教科書で確認させる。

—質問内容—

- STEP 1 Yes / No で答える質問、または、単語や句だけで答えられる質問にする。
- STEP 2 Yes / No で答える質問の数を減らし、短い文章で答える質問を入れる。
- STEP 3 Yes / No で答える質問をさらに減らし、完全な文章で答える質問を入れる。

(ウ) 活動Bに関する事例③ 簡単なディベート

新学習指導要領では、「コミュニケーション英語Ⅱ」という科目がある。その「2 内容Ⅱ」では、「聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合うなどして結論をまとめる。」とある。また、指導する際の配慮事項に「エ 説明や描写の表現を工夫して相手に効果的に伝わるように話したり書いたりすること」とある。この研究を開始してから、これまでいくつかの方法で自分の意見を相手に伝える活動をしてきた。生徒の中に、自分が話すことを相手に理解してもらいたいという姿勢が見られるようになり、お互いに試行錯誤しながらも何とか伝えよう、何とか理解しようとする様子も見られるようになってきた。そこで、生徒に達成感や有能感をもたせられるような指導法を工夫

し、1時間で完結するようなミニディベートを取り入れた。以下に示すのは、授業で初めてディベートを実施したときの1時間の授業の流れである。

—実施した授業の流れ—

1 Warm up(5分) 前述の Rows and Columns を実施する。

2 Mini Debate(45分)

(I) ディベートの導入

<実際の授業でのやりとり>

T: Today, we are going to hold a mini-debate. Do you know about Debate?

(何となく分かるという生徒が多かったため、ここでディベートについて日本語で簡単に説明をする。) I will give you a topic. Today's topic is "Tochigi is a good place to live in."

Now, I would like you to do janken with the person next to you. The winner is the Yes-side and the loser is the No-side. (じゃんけんをさせる。) OK, it's time to debate!

But, in order to hold an active debate, I will give you four minutes to prepare. (4分

間、生徒に自分の意見を考えさせる。) Try to hold a debate about the topic with your partner in English. Use as much English as possible. Don't mind making any mistakes. Let's begin the debate with your partner. I will give you four minutes.

Ready, go!

S: (ペアで自分の意見を述べ合う。)

T: Stop talking. Now, please give your opinions to the class. I want you to use as much English as possible, but you can use Japanese if necessary. How about the Yes-side?

S: (肯定側の生徒が3人答える。)

T: (教師は板書する。) How about the No-side?

S: (否定側の生徒が3人答える。)

板書内容 *できるだけ生徒の発話通りに板書した。

"Tochigi is a good place to live in."	
○the Yes-side	○the No-side
• a lot of nature	• countryside
• The production of strawberries is No.1.	• little trains and buses
• a lot of delicious food, for example water	• Stores are closed early.

T: Thank you. You did a good job, but this is not a real debate. Do you know why?

S: 「肯定側と否定側がただ意見を言ってるだけ。」

T: That's right. All you did was to give your own opinions and to listen to them. In a debate, 「お互いに相手の意見に対して反論を述べ、自分の主張の方が正しいことを論証していきます。例えば、Yes 側の人、『栃木は自然が豊かだ。』という意見に対しては No 側はどんな反論ができますか？」

S: 「生活するのに不便なときがある。交通の便が悪いとか。あつ、little trains and buses !」

T: That's right. You noticed very important point.

(II) ミニディベートの実践

(I) のようなやりとりを通して、ディベートとは意見を述べ合うだけではなく、自分の主張が正しいことを論証していくものであるということを生徒たちに理解させた。その後、別のトピックでもう一度ディベートを実践した。

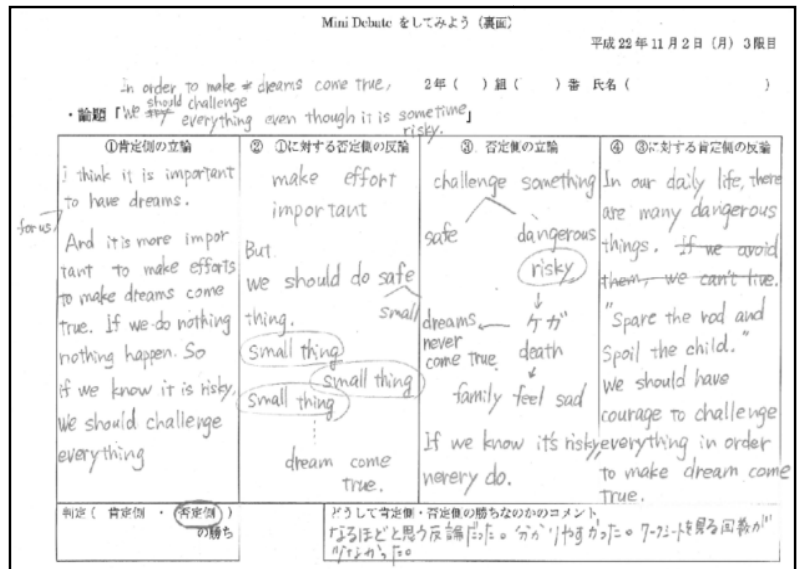
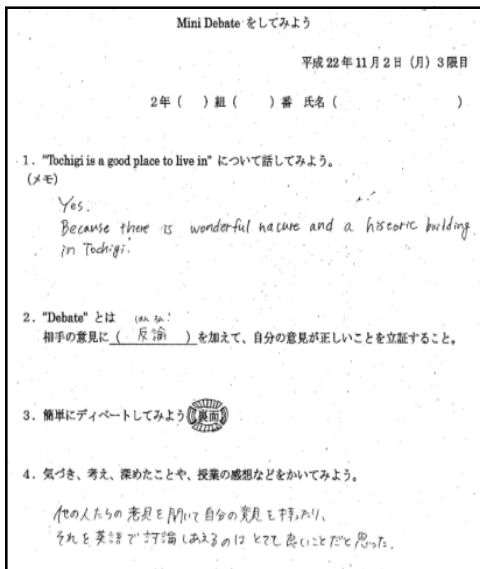
—指導手順—

- ア) ワークシート（資料4）をもとに、ディベートについて詳しく説明する。トピックは本文の内容と関連させ、「In order to make dreams come true, we should challenge everything even though it is sometimes risky.」にした。
- イ) 肯定側と否定側を決め、それぞれの意見を5分でワークシートに書かせる。できるだけ英語で書くように指導する。
- ウ) 2つのペアで、4人グループを作らせる。ペアごとにディベートをし、発表していないペアにジャッジさせる。
- エ) 肯定側の生徒に1分で自分の意見を述べさせる。否定側とジャッジの生徒にそれを書きとらせる。
- オ) 否定側の生徒に1分で自分の意見を述べさせ、肯定側とジャッジの生徒にそれを書きとらせる。
- カ) ディベートをしているペアに、5分で相手の意見に対する反論を英語で書かせる。ジャッジの生徒にはどちらの主張の方が説得力があったかなどを話し合わせる。
- キ) 肯定側の生徒から反論を1分で述べさせる。否定側とジャッジの生徒にそれを書きとらせる。
- ク) 否定側の生徒に1分で反論を述べさせ、肯定側とジャッジの生徒にそれを書きとらせる。
- ケ) ジャッジの生徒に、どちらの主張の方が説得力があったかを判定させる。

(III) 振り返り

ワークシートを用いて振り返りをする。感想や気付いたことなどを書かせる。

<資料4> 生徒のワークシート



(エ) 段階Ⅲの研究内容の考察

生徒同士のインタラクションを増やすための活動として、段階Ⅱで実施していた英問英答のレベルを上げ、「書く」作業を入れずに、「聞いて答える」という活動を行った。Yes / Noで答えられる簡単な質問や、単語や句で答えられる質問には正確に答えられていた。自発的に質問を聞き取ろうとする態度が見られ、「Once more, please」などと、相手に質問を繰り返してもらっている生徒もいた。しかし、文章で答える必要がある難しい質問になると、文法や語彙を気にしながら頭の中で英文を作って答えるという状況になってしまった。答えに「つまったり」「パス」といって答えなかったりして、活動に対する意欲を失う生徒も見られた。そこで、できるだけ生徒が答えやすい質問を作成するよう留意し、やりとりの場面を増やす

ように工夫した。

これまでの表現活動を通して自分の意見をもつこと、それを伝えることの重要性を生徒は感じていたので、英語で表現することに挑戦させたいと考え、簡単なディベートを授業で実践した。ディベートでは、相手の主張が予想できないので、相手の伝えたいことをしっかり聞きとって理解する必要がある。また、相手に理解してもらえるように、自分も要点を的確に整理して伝えなければならない。ミニディベートとして、1時間で終了するディベートにしたが、生徒はこの活動に意欲的に取り組んでいた。授業中の様子や、ワークシートの内容から判断すると、「自分の意見はきちんともってはいえるが、それを英語でどう表現するか」が一番の課題だった。実施後、生徒に感想を聞いたところ、「難しいけど、楽しかった」「相手に伝わったとき嬉しいし、相手の言っていることが理解できると嬉しい」「ちょっとだけ外国の人になった気分だった」など、前向きな意見が多かった。到達目標ごとの考察は次の通りである。

活動Aの到達目標の達成状況

- ・ Yes / No で答えられるものや、単語で答えられる質問には、意欲的に答えようとする様子が見え、正しく答えられている生徒が多かった。しかし、文章で答える質問は、生徒にとっては口頭で答えるのは難しいようであった。英問に対し、答えを書かずに即興で口頭で答えるものと、答えを書いてから答えるものと、教師が振り分けをして、生徒の意欲を持続させる必要性を感じた。

活動Bの到達目標の達成状況

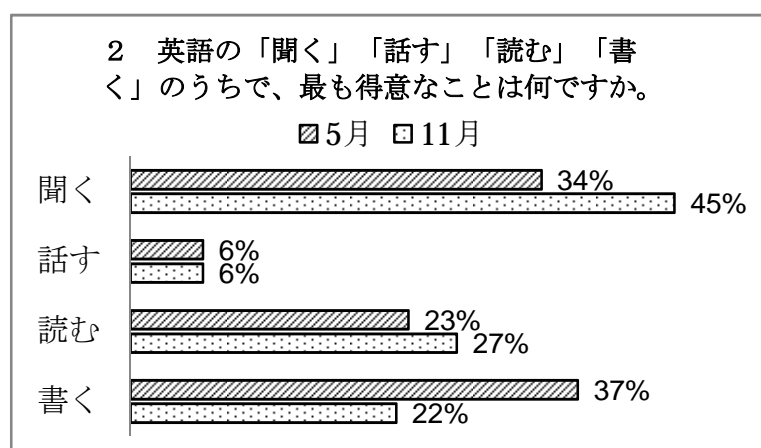
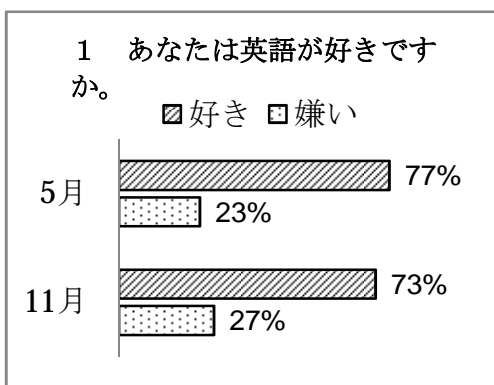
- ・ 積極的に取り組んでいた。伝えたいことがあってもなかなか伝えられず、はがゆい思いをしている生徒も多く見られたが、別の表現を探したり、絵を描いたりして、自分の意見を英語でどう表現するかという課題に取り組んでいる姿勢が見られた。

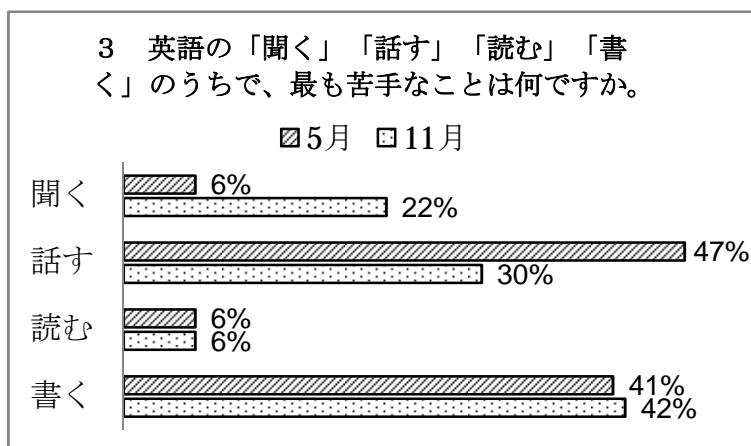
5 検証とまとめ

(1) 事後アンケートによる検証

これまでの活動を振り返るために、事前アンケートと同じ内容のアンケートを同じ生徒を対象に行った。

<実施したアンケート> 対象：2年人文国際コース 35名





<以下は主なものを抜粋>

- 4 英語を「聞く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・相手が言ったことを正確に聞き取れるようになりたい。
 - ・相手が言っていることを理解してあげられるようになりたい。
- 5 英語を「話す」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・自分が伝えたいことをきちんと伝えたい。
 - ・ディベートは難しいけど楽しいから、もっとすらすらできるようになりたい。
 - ・英問英答で書かなくても答えられるようになりたい。
- 6 英語を「読む」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・教科書の本文を日本語に訳さないで、質問に答えながら英語で理解したい。
 - ・話せるようになりたいから、まずは上手に読めるようになりたい。
- 7 英語を「書く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・自分の言いたいことをもっと長い文章で書けるようになりたい。
 - ・自分が伝えたいことが英語だと伝えられないので、英文できちんと伝えることができるようになりたい。

アンケートの集計結果から、「話すこと」を苦手と感じる生徒が減っていることが分かる。これは、これまでの活動を通して、英語で表現することへの抵抗感が減ってきているからだと考えられる。また、「聞くこと」を得意と感じる生徒が増えていることが分かるが、反面、「聞くこと」を苦手と感じる生徒が増加した。これは相手の伝えたいことを正確に理解する場面を授業中に設定したため、これまで理解していたつもりであったことが、実は正確に理解できていなかったと自覚したためであると思われる。また、「書くこと」を得意とする生徒が減っているが、その理由としては「自分の伝えたいことがなかなか書けないから」という前向きなものが多かった。また、問5の「話すこと」に関する自由記述では、ほとんどの生徒が「自分のことを伝えられるようになりたい」と書いていた。

(2)まとめ

研究の当初に設定した仮説1、2は、概ね実証できたと考える。

仮説1に関しては、教師が発話する英語の量を少しずつ増やしたことで、生徒への英語のインプット量を増やし、生徒に英語でのインプットに慣れさせるところから始めた。最初は教師からの一方的な情報伝達になってしまう場面もあったが、「聞いてばかりではなく自分も話したい」という意欲が徐々に生徒の中に見えるようになってきた。十分なインプットをすることは、アウトプットへの必要不可欠な要素であり、アウトプットすることは、コミュニケーションへの第一歩である。

仮説2に関して最も留意したことは、散発的に特別なことを行うのではなく、日々の授業に効果的な言語活動を取り入れることである。毎時実施したことは、教師が積極的に授業中に英語を使用することによって、英語を話す雰囲気を作り出したことである。また、ワークシートを用いての英問英答を導入し、じっくり教科書を読みながら答えになるキーセンテンスを探し出させて、英文を書かせた。この活動は、自分の意見を英語で表現するための基礎力を養うことにつながった。日本語を用いることもあったが、各パートで自分の意見を書かせることによって、自分の考えを整理し、的確にまとめることができるようになってきた。さらに、書いた文章をもとに、様々な方法でインタラクションを図る活動を取り入れた。ワークシートや活動の様子から判断すると、生徒の「相手の考えや情報を理解し、自分の意見を伝える」能力は伸長してきていると感じる。

英語で自分の考えを即座に述べるというのはとても難しいことである。この研究では、自分の伝えたいことを十分に英語で表現できるまでには至らなかった。しかし、読んだことや学んだことについて生徒が自分の意見をもったり、友人の意見を尊重したりする態度を養うことはできたと考えている。何回もワークシートに生徒の感想や意見を書かせてきたが、それらを追ってみると、そのような態度が育ちつつあることを確信することができる。このことが、本研究の最大の成果だったのではないかと考えている。

今回の研究では、「英語でやりとりをする」と、内容が稚拙になってしまったり、正確な英語ではなかったりするという問題点を解決することはできなかった。意見や思いを伝えられる英語力、相手のことを聞き取れる英語力を身に付けさせることが教師としての課題であると感じている。今後は、「正確に」英語を理解し、「適切に」表現させることを目指し、さらに研究を進めていきたい。

事例 3

リーディングにおける「授業を英語で行う」工夫

1 課題設定の理由

現行の学習指導要領にある「リーディング」という科目は、新学習指導要領ではなくなる。文部科学省が示した科目変更のイメージ図によると、リーディングで扱っている内容は、「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の中に含まれることになる。科目名にコミュニケーションという言葉が付くということは、今後「コミュニケーション能力の育成」がますます重要課題となってくるということであると考えられる。新学習指導要領ではコミュニケーション能力を育成するために、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業を英語で行うことを基本とする」と明記された。現在の授業では、教科書本文の内容理解が授業の主な目的になっており、そのために使用する言語はほとんどが日本語である。学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、生徒のコミュニケーション能力を育成するための一つの手段として、英語で内容理解をするためにはどのような活動があるかをテーマとし、リーディングの授業において本研究を行うことにした。

2 生徒の実態及び仮説の設定

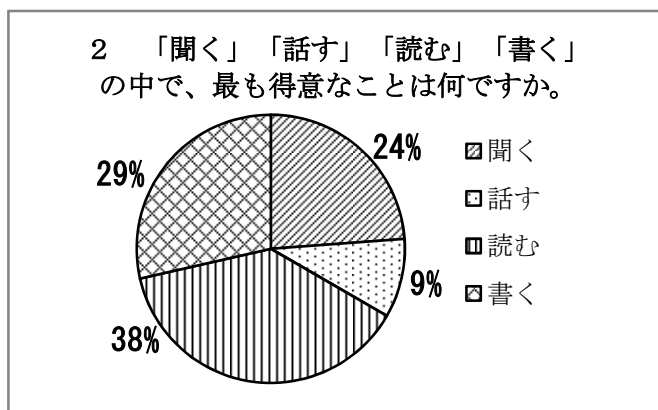
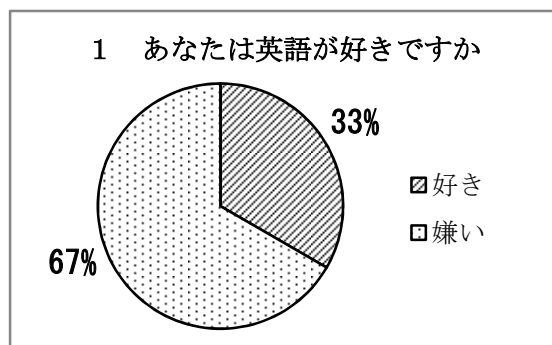
(1) 事前アンケート

生徒の英語学習に対する意識を調査するため、5月下旬にアンケートを実施した。調査対象は3年生 42名で、主に文系の四年制大学への進学を希望する生徒が在籍するクラスである。カリキュラムとしては、「リーディング」4単位と「ライティング」2単位を履修している。

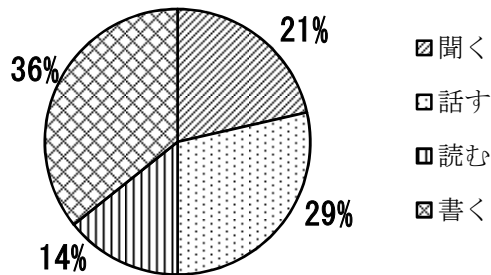
<実施したアンケート>

- 1 あなたは英語が好きですか。
- 2 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も得意なことは何ですか。
- 3 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も苦手なことは何ですか。
- 4 英語を「聞く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
- 5 英語を「話す」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
- 6 英語を「読む」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
- 7 英語を「書く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。

<アンケート結果>



3 「聞く」「話す」「読む」「書く」
の中で、最も苦手なことは何ですか。



※以下の回答については主なものを抜粋

4 英語を「聞く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。

- ・会話の内容を理解できるようになりたい。
- ・テストや模試のリスニング問題ができるようになりたい。
- ・単語を正確に聞き取れるようになりたい。

5 英語を「話す」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。

- ・外国人の方と会話ができるようになりたい。
- ・簡単な英会話ができるようになりたい。
- ・頭で考えたことを言葉で表現したい。

6 英語を「読む」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。

- ・読んでいる内容を理解できるようになりたい。
- ・英語の本や英字新聞を読めるようになりたい。
- ・速読ができるようになりたい。

7 英語を「書く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。

- ・英作文ができるようになりたい。
- ・すらすら書けるようになりたい。
- ・多くの単語を使って書けるようになりたい。

日ごろ、授業で行っていることのほとんどが本文の和訳を中心とした内容の読み取りであるせいか、「読むこと」を得意としている生徒が多いことが分かった。2年次後半から、長文読解の教材を週末課題等で学習してきたことも要因であると推測される。4技能のうち「書くこと」を苦手とする生徒が最も多く、次いで「話すこと」に苦手意識をもつ生徒が多いことが分かった。対象の生徒は1年生の時から担当しているが、現在の「リーディング」の授業はもちろん、今までの授業においても「話す」活動や意見を「書く」活動が少なかったことがその一因と考える。さらに、67%の生徒が英語が嫌いだと回答していることも踏まえ、授業改善の必要性を感じた。

今回の調査は四年制大学進学希望者を対象としていることから、「聞く」「読む」「書く」といった技能に関しては、「模擬試験等で点数がとれるようになりたい」という思いがうかがえる回答が多かった。「話す」ことに関しては、「英語で会話ができるようになりたい」と回答する生徒が多かった。

(2) 事前アンケートに基づく仮説

アンケートの結果から、以下の仮説を立てた。

仮説 1

教師が授業中にできるだけ多くの英語を発話し、英語でのインタラクションを増やしていけば、生徒が英語に触れる機会が増え、英語によるコミュニケーションへの興味・関心が高まる。

仮説 2

生徒が得意と感じている「読むこと」を中心とした活動と、苦手意識の強い「書く」活動を統合的に指導することで、自分の意見を伝える能力が伸長する。

(3) 到達目標

現行の学習指導要領の「リーディング」の目標は、「英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解する能力をさらに伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ことである。「リーディング」におけるコミュニケーション活動とは、「書かれた情報や書き手の意向などを、場面や目的に応じて読み取り適切に対応することを意味する。」と現行の学習指導要領解説に書かれている。コミュニケーション活動の例として、「まとまりのある文を読んで、書き手の意向などを理解し、それについて自分の考えをまとめたり、伝えたりする。」となっている。

新学習指導要領の趣旨を踏まえ、このようなコミュニケーション活動を英語で実施し、生徒のコミュニケーション能力を伸長したいと考えた。まずは、上記の「まとまりのある文を読んで、書き手の意向などを理解し」が指す内容理解を英語で行い、さらに、「それについて自分の考えをまとめたり、伝えたりする」と書かれているように、学んだことについて自分の意見を伝える能力を身に付けさせることを到達目標とする。

3 本研究の流れ

本研究では、ABCの三種類の活動を、3段階に分けて実施した。

活動A	リーディングの授業における導入に関する活動
活動B	リーディングの授業における内容の確認に関する活動
活動C	リーディングの授業における内容の定着に関する活動

<具体的な実施内容>

活動 段階	活動A	活動B	活動C
I	視覚教材を用いた oral introduction 事例①	T/F Question や Q & A で内容を理解する活動 事例①	topic sentence を抜き出す活動 (skimming) 事例①
II	word matching および scanning 事例②	T/F Question や Q & A を作成する活動 事例②	topic sentence を用いて summary を書く活動 事例②
III		作成した質問を用いたコミュニケーション活動 事例③	意見文を書く活動 事例③

4 実践内容

(1) 段階 I (6、7月)

これまで、和訳を中心とした授業を実施してきた。本研究では、最終的には英語でのアウトプットを目指しているが、そのためにはまず英語のインプットを増やす必要がある。まずは教師の英語の発話を増やすことにした。指示はもちろんであるが、本文を読み取る際もなるべく英語を用い、インタラクションを図りながら内容を理解させる活動を効果的に取り入れた授業

を実施することにした。

段階 I の到達目標

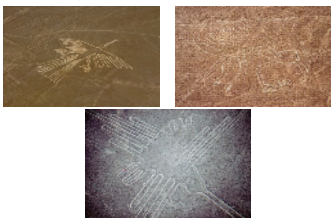




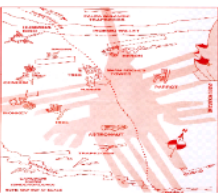
- 活動Aに関して ・教師の **oral introduction** を聞いて、本文の内容を理解することができる。
- 活動Bに関して ・本文に関する口頭での T/F Question を通して、内容を理解できる。
- 活動Cに関して ・skimming で、各段落の topic sentence を抜き出すことができる。

使用教科書 Vivid Reading Lesson 2 *A World Mystery – The Nazca Lines* (第一学習社)

(ア)活動Aに関する事例① 視覚教材を用いた英語での oral introduction

教師の英語の発話量を増やすといっても、一方的な情報伝達にならないようにしなければならない。また、英語を聞きとることに生徒を慣れさせる必要もある。これらのことに留意しないと、生徒の授業へ取り組む意欲が低下してしまうこともある。そこで、生徒の興味・関心を高めるために、視覚教材を用いながら oral introduction を行うことにした。プロジェクトを用い、写真を提示しながら本文に関する英問英答を行った。スライドに本文に関する質問を提示しながら、英問英答を行うことで、活動の難易度を下げ、教師と生徒の両方の英語の発話量を増やせるようにした。ペア活動を基本とし、教師の質問後、ペアで考える時間を与えてから答えさせるようにした。また、最後に「どのように描かれたかを想像してみよう」という質問をし、これから学習する内容に興味・関心をもたせるようにした。(資料 1)

<資料 1 >

<p>Lesson 2</p> <p>A World Mystery ? The Nazca Lines</p>	<p>Q. 1 What are these?</p> 	<p>Q. 2 Where is Peru?</p> 
<p>Q. 3 What is this?</p> 	<p>Q. 4 What is this?</p> 	<p>Q. 5 What is this?</p> 
<p>The Nazca Lines</p> 	<p>質問例</p> <ul style="list-style-type: none">・ Have you ever heard of the Nazca Lines or 'nasuka no chijoue'?・ Where are the Nazca Lines?・ Do you know where Peru is?・ What are the Nazca Lines?	

・ Try to guess how the Nazca Lines were drawn in pairs. I want you to think about it in English, but you can use Japanese if necessary.

(イ)活動Bに関する事例① T/F Question による内容理解

これまでも生徒に本文の内容を理解させるために、日本語での Q & A は実施してきた。しかし、英文を読みながら質問に答えるのではなく、日本語訳を読みながら答えている生徒が

多く、英文読解というよりは、日本語訳の確認のような作業になっていた。「生徒が英語に触れる機会を増やす」ため、英文を読みながら英語で質問に答え、内容を理解していく活動を実施した。生徒が少しずつ英語を聞くことにも発話することにも慣れていくように、段階的な指導を心がけ、まずは、T/F Question を実施した。これまでのように、日本語で内容を確認した後に行うのではなく、最初にT/F Question を実施し、その後今までのように日本語で内容を確認し、再度同じT/F Question を行った。生徒が内容を把握していく際に誤解しやすい箇所や意味がとりにくい箇所について質問するようにした。また、視覚教材が有効的であることが分かったため、難しい箇所は絵（資料2）を提示しながらT/F Question を行った。基本的な授業の流れは以下の通りである。

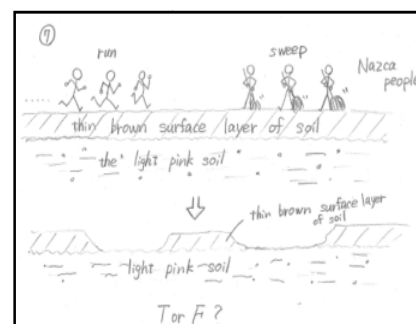
—基本的な指導手順—

- ア) 本文を目で追いながらCDによるリスニングをさせる。
- イ) 教師が英語でT/F Question をする。
- ウ) ペアで答えを確認させる。
- エ) 日本語で本文の内容を理解させる。
- オ) 教科書を閉じさせ、もう一度同じT/F Question をする。
- カ) 自分で考えた最初の答えが合っていたかどうか、もし違っていたらどこを読み違えたのかを確認させ、本文にアンダーラインを引かせる。
- キ) 音読をする。

<資料2>

Lesson 2 (Part 1)のT/F Question の例

1. If you fly over the Nazca plain, you see a few drawings on the ground.
2. We can understand what all of the drawing mean.
3. All the lines are as narrow as six inches.
4. Some lines run for many miles.
5. Some lines may be as wide as 100m.
6. The Nazca people removed dark surface stones and placed them in patterns.
7. To reveal the light pink soil, the Nazca people ran and swept the desert's thin brown surface layer of soil.
8. These light-colored Nazca Lines have not changed for many centuries, because the area is wet and climate is not likely to change.



(ウ) 活動Bに関する事例② Q & Aによる内容理解

生徒はT/F Question に積極的に取り組んでいた。そこで、T/F Question を実施しながらも、T/F Question の後に英語によるQ & Aを取り入れた。T/F Question では教師の英語の発話量は増えるが、生徒の発話量が増えないためである。留意した点は、生徒が答えやすい質問を作成することと、答えとなる英文の難易度を上げすぎないことである。指名された生徒だけが答えるのでは、生徒の発話量を増加させることができないため、答え合わせの際には、教師が質問し、まずはペアで答え合わせをし、その後教師がもう一度質問し、クラス全体で口頭で答えるという形にした。

Lesson 2 (Part 3)のQ & A例

1. Could the Nazca people see the figures from the air?
— Why?
2. How old are the drawings?
3. There are many explanations. There are two examples that the figures were made.
 - ① For what could land safely on the ground?
 - ② Why did the Nazca people build balloons?
 Which explanations do you believe? Ask each other in pairs.
4. Who is one of the first modern researchers to become interested in the Nazca figures?
5. Did he think that the lines were “the largest astronomy book in the world”?
6. What did he believe?
— Please explain “astronomical alignments” in Japanese.
7. Could he show his theory completely?
8. Who took up the work after his death?
— What is her job?
9. What did she work out?
— Were they accepted by other scientist?
10. Other scientists didn't accept her calculations, because there is a problem. Can you guess what it is?

<資料 3 >

(エ) 活動Cに関する事例① 各パートの topic sentence を利用した summary 作成 (skimming)

事前アンケートでは、「書くこと」が苦手と答える生徒が一番多かった。しかし前述の通り、学習指導要領のリーディングの言語活動である「まとまりのある文を読んで、書き手の意向などを理解し、それについて自分の考えをまとめたり、伝えたりする。」ためには、英文を書く必要がある。そこで、ワークシート(資料3)を用いて、topic sentence を抜き出させ、それを利用して summary を書かせることで「書く」活動へとつなげるようにした。ただし、段階的指導が必要であると考えたため、初回は穴埋め形式の summary にした。生徒の様子を見ながら、徐々に英文を skimming できるように指導した。

Lesson 2 A World Mystery — The Nazca Lines WORKSHEET ①

No. _____ Name _____

Q1. Pull out the topic sentences from each part of the text.

Part 1 Who made the drawings and why?
→ Because of the area's dry, stable climate, these light-colored Nazca Lines have remained nearly unchanged for many centuries.

Part 2
→ One person ~ third one.
The symbols ~ a magnifying system to copy it.

Part 3
→ He thought ~ "the largest astronomy book in the world"
He believed ~ certain astronomical alignments.

Part 4
→ They should be preserved forever.

Q2. Fill in the blanks appropriately so that the passage agrees with the content of the text lesson. (p.88)

The Nazca plain is full of mysteries. There are various drawings on the (ground). Who drew such enormous pictures which could only be seen from the air? How were they drawn? What was their purpose?

Straight lines are thought to have been drawn by using (stones) and the enormous pictures by using a (magnifying) system. The Nazca people made the lines by removing dark surface (stones) and placing them in patterns, or by removing the desert's thin brown surface layer of soil.

The purpose of the drawings remains a mystery. There are many possible explanations. One is that the figures were made so that (space) machines could land safely on the ground; a second is that the Nazca people built (balloons) that allowed them to see the figures when they flew over the area. A recent theory says that the drawings may be related to (water). Ancient waterways seem to be connected with some of the lines, but more evidence needs to be collected to support this theory.

(オ) 段階 I の研究内容の考察

教師が意図的に授業中の英語の発話量を増やすことで、生徒の英語の発話量も確実に増えてきた。教師が日本語で話しかければ、生徒は日本語で答える。しかし、教師が英語で問いかければ、生徒は何とかして英語で答えようとする。そのような言葉のやりとりの場面が授業中に多くみられるようになった。細かな英文解釈、文法説明などは日本語で行った。生徒に英語でコミュニケーションを図ることに対して意欲をもたせる必要性を感じ、様子を見ながらであるが、徐々に英語の発話量や、英語でのやりとりの場面を増やした。英語で授業を

行う際に一番問題であると感じたのは、生徒の語彙力の不足である。生徒は、言いたいことがあっても言えない、伝えたいことがあっても伝える語彙がない、という状況であった。また、「書くこと」に対しては、まだまだ意欲的に取り組むことができない場面も多くみられ、指導の改善が必要であった。到達目標ごとの考察は以下の通りである。

・活動Aの到達目標の達成状況

英語だけで本文を導入するのではなく、PCやプロジェクタを使用して英語で授業の導入を行うことは、効果的な方法であった。スクリーン上の画像を指しながら質問したり、そこから考えられる補足的な質問をしたりすると、生徒は顔を上げて聞くことになり、顔を合わせてスムーズな英語によるやりとりができた。生徒の反応もよく、視覚教材の有用性を改めて感じた。視覚教材を補助教材として使用することで、「教師の oral introduction を聞いて、内容を理解することができる」という到達目標は達成された。

・活動Bの到達目標の達成状況

指示も含めて英語での T/F Question による内容理解の活動を実施したところ、生徒は抵抗なく活動していた。今回は、同じ T/F Question を本文理解の前と後の二回行ったが、特に、本文確認後に再度 T/F Question を行うことで、自分が勘違いしていたことに気付く生徒もいた。また、ペアと正解の数を競い合うなど、活動に主体的に取り組む生徒が多かった。「本文に関する口頭での T/F Question を通して、内容を理解できる。」という到達目標は達成された。

生徒は T/F Question に意欲的に取り組んでいたため、英語での Q&A を実施した。しかし、英語で質問されたことについて、英語で情報を整理し、英語でそれを伝えるという作業は、やや難易度が高かったようだ。そこで、易しい表現で言い換えたり、一度英文を書いてから答えさせたりと、段階的な指導を心がけながら、教師が根気強く取り組むことで、生徒も徐々に慣れ、英語で何とか解答することができるようになってきた。

・活動Cの到達目標の達成状況

リーディングという授業の特質を考えて、本文の内容理解を目標とし、そのための一つの手段として summary を書く活動を実施した。各パートの topic sentence をつなげて簡単な summary を作成するという活動内容であったが、topic sentence を抜き出すことに苦労していた生徒がいた。さらに、topic sentence を抜き出すことができても、多くの生徒が、それらをつなぐことができないという問題点が出てきた。そこで、生徒の書く意欲を損ねないように、語と語、文と文をつなげるため接続詞と前置詞を確認するワークシート（資料4）を作成した。ワークシートを活用することで、topic sentence をつなげるための手だてが見つかり、取り組みやすくなったようである。「skimming で、各段落の topic sentence を抜き出すことができる。」という到達目標は、ワークシートを用いたり、穴埋め形式を用いたりすることで、何とか達成できた。

<資料4>

Lesson 2 A World Mystery — The Nazca Lines WORKSHEET ©

No. _____ Name _____

Q1. Write down as many conjunctions as possible.

No.	or	No.	since	No.	
No.	and	No.	while	No.	
No.	but	No.	once	No.	
No.	both	No.	when	No.	
No.	that	No.	where	No.	
No.	whether	No.		No.	
No.	if	No.		No.	
No.	though	No.		No.	
No.	as	No.		No.	
No.	before	No.		No.	
No.	after	No.		No.	
No.	so	No.		No.	

Q2. Write down as many prepositions as possible.

No.	over	No.	along	No.	until
No.	on	No.	toward	No.	till
No.	of	No.	about	No.	above
No.	from	No.	beside	No.	below
No.	to	No.	between	No.	within
No.	as	No.	during	No.	against
No.	without	No.	across	No.	before
No.	far	No.	into	No.	after
No.	by	No.	through	No.	around
No.	in	No.	under	No.	near
No.	at	No.	among	No.	with

(2) 段階Ⅱ・Ⅲ（9、10月）

(ア) 段階Ⅰの考察に基づく改善工夫

段階Ⅰでは、生徒の英語でのアウトプットを目指し、英語のインプット量を増やす工夫をした。授業の雰囲気作りを大切にし、英語でのやりとりがしやすくなるよう留意した。生徒も、英文を読み、英語で考えるという作業には慣れてきた。しかし、自分の意見をまとめる、考えたことを英語で相手に伝え理解してもらおうという段階までは到達できなかった。英語で授業を行ったり、英語で様々な活動を行ったりする際に一番課題であると感じたのは、生徒の語彙力が不足していることである。また、T/F Question やQ&Aでは、教師からの英語でのインプット量が増えることと、英語で考える作業が入ることは利点であるが、生徒の英語でのアウトプットが少ないことが課題であった。段階Ⅰでは、教師によるT/F Question やQ&Aに生徒は解答するだけだったため、教師1対生徒40のやりとりが多くなってしまい、十分なインタラクションが図れていなかった。生徒自身にT/F Question やQ&Aの問題を作らせ、それを生徒同士で質問し合うという活動を取り入れるなどの改善が必要であると感じた。さらに、段階Ⅰではワークシートを用いて topic sentence を抜き出し、穴埋め形式での summary を書かせてみたが、徐々に穴埋めではなく生徒自身に書かせるような段階的な指導をしていくことにした。また、生徒の中には英語に自信がない者がいるので、ペアワークやグループワークなども取り入れる工夫をしていく必要がある。

段階Ⅱ・Ⅲの到達目標

活動Aに関して

- ・導入（新出単語、本文の内容）において、英語での word matching をすることで語彙力をつける。
- ・与えられた英語での問いに対して scanning をすることで、内容を理解することができる。

活動Bに関して

- ・本文に関する T/F Question やQ&Aを作成し、それを基にコミュニケーション活動することができる。

活動Cに関して

- ・topic sentence を抜き出して summary を書くことができる。
- ・本文の中で最も印象に残った文を抜き出し、その理由を書いて相手に伝えることができる。

使用教科書 Vivid Reading Lesson 3 *She Helped Abolished slavery*（第一学習社）

(イ) 活動Aに関する事例② word matching による新出単語の導入

生徒の語彙力不足を補うための活動として、ワークシート（資料5）を用いて、新出単語の導入において英語で word matching させた。これまでは日本語で意味を確認していたが、新出単語と簡単な英語で言い換えた文章をマッチングさせることで、新出単語の意味を英文の説明から推測させた。答え合わせをする際は、まずはペアで確認させ、教師が英語の説明文を読み、“What does this sentence mean?”と問いかけ、生徒が英語で答えるという流れにした。最後に、自分ができなかったところや、意味が不確かだった単語を、辞書を使って確認させた。定着につなげるために、次の授業では復習としてワークシートなしで同じ活動を行った。また、教師が問いかけ生徒が答えるだけでなく、ペアワークでも実施した。困っている相手に一生懸命に英語でヒントを出す姿が見られた。

(ウ) 活動Aに関する事例③ scanning による本文の導入

必要な情報を探しながら本文を読むという scanning の手法を用いて、本文の導入を行った。各パートごとの質問をあらかじめワークシート（資料5）に与えておき、その質問の答えを探しながら本文を読んでいく活動を行った。質問は、生徒が誤解しそうな箇所や、ポイントとなる箇所から出題した。生徒はまず質問を正確に理解する必要があるため、質問事項はペアワークで確認させた。英語で要点をつかむ作業であるため、topic sentence を探す際の手がかりになったようである。また、ある程度の量を時間内で読まなければならないので、速読の練習にもなったようだ。生徒は意欲的に取り組み、その後の内容理解のための T/F Question や Q & A にスムーズに移行できた。

<資料5>

Lesson 3 *She Helped Abolish Slavery* WORKSHEET ①

No. _____ Name _____

Q1. Match the following words with English sentences.

woodshed	→ extremely and shockingly or distressingly bad or serious
composition	→ someone who is owned by another person and works for them for no money
preacher	→ illegal activities in general
slavery	→ a work of music, literature, or art (an essay, especially one written by a school or college student)
terrible	→ to get money for work that you do
earn	→ someone who talks about a religious subject in a public place, especially at a church
slave	→ the state of being a slave
crime	→ any of several parts of something that are published, broadcast, or made public in sequence at intervals
installment	→ a shed where wood for fuel is stored
cabin	→ a small shelter or house, made of wood and situated in a wild or remote area
	→ an angry argument or disagreement, typically between people who are usually on good terms

Q2. Based on the content of the text lesson, answer the following questions.

Part 1: What did Harriet's father wish?
→ He wished she was a boy so that she could grow up to be a preacher, like he was.

Part 2: What did she begin to do because her husband earned very little?
→ But Calvin Stowe earned very little, so Harriet began to write stories for women's magazines.

Part 3: What did she write about in her story in a religious magazine?
→ She wrote about a slave.

Part 4: What did her story do to people?
→ Of course, she alone had not started it, but her book had done a great deal to make people realize what they felt.

(エ) 活動Bに関する事例② 英語で T/F Question や Q & A を作成する活動

段階 I では、教師による T/F Question や Q & A を実施したが、課題として生徒の発話量が少ないことが挙げられた。そこで、本文の内容理解の前の T/F Question や Q & A は教師が行ったが、内容理解後はワークシート（資料6）を用いて、生徒に T/F Question や Q & A を作成させた。本文のポイントだった箇所や、理解するのが難しかった箇所を質問するように指導した。また、本文と全く同じ表現ではなく、少し表現を変えるように指示した。最初は戸惑っている生徒もいたが、教師の T/F Question や Q & A がヒントになることを伝え、それらをより注意して聞いたり、メモをとったりしていた。慣れてくると、わざとひっかける質問を作成したりして、生徒なりに工夫して楽しく活動していた。基本的にはペアワークとした。

<資料6>

Lesson 3 *She Helped Abolish Slavery* WORKSHEET ②

No. _____ Name _____

Q1. Based on the content of the lesson, make True or False questions. Then ask the other group the questions.

Part 1
→ She knew her father loved her and was not proud of her.
The answer is (true / false).

Part 2
→ She didn't marry a professor named Calvin Stowe.
The answer is (true / false).

Part 3
→ Calvin got an offer to teach in the West.
The answer is (true / false).

Part 4
→ "Wish she were a boy," her father had said.
The answer is (true / false).

Q2. Based on the content of the lesson, make questions and answers. Then ask the other person the questions.

Part 1
Q: Who had started such a school in Hartford, Connecticut?
A: It was Harriet's older sister, Catherine.

Part 2
Q: Why was Harriet busy?
A: Because she did keeping house and tending the children.

Part 3
Q: What was seen it published?
A: It was as a book.

Part 4
Q: Who had said to her, "Wish she were a boy."
A: Her father had.

(オ) 活動Bに関する事例③ 作成した T/F Question や Q & A 用いたコミュニケーション活動

活動Bに関する事例②で、生徒に T/F Question や Q & A を作成させた。それを生徒同士で出題したり答えたりすることで、生徒同士が英語でインタラクションを図る活動をした。英語に苦手意識をもっていたり、思うように質問が作れなかったりする生徒がいるので、最初はペアワークとした。ただ質問を読みそれに答えるのではなく、ヒントを出すなどして、

相手が答えやすいように出題するよう工夫させた。また、活動中は日本語の使用を禁止にしたため、何とか英語で相手に伝えたり、相手の言いたいことを理解しようとしたりして、協力しながら活動している生徒が多かった。慣れてからは、四人のグループでの活動にし、一人が出題し、三人が速さと正確さを競いながら解答するという活動にした。他の生徒の質問を聞き、「そういう質問があったかあ」「その質問上手い！」などと、学び合う姿もみられ、生徒たちは積極的に取り組んでいた。

(カ)活動Cに関する事例② 各パートにおける topic sentence を用いた summary 作成の活動

活動Cに関する事例①の発展形である。生徒は topic sentence を抜き出せるようになってきたのでそれを自分の力でつなげて summary を作らせた。英語を書くことに苦手意識が強い生徒たちであるので抜き出した文をつなげていくことで、ある程度の長さの英文を書けるようにし、自信をもたせるようにした。ワークシート(資料7)を用い、まずは topic sentence を抜き出させ、それを基に summary を作成させた。基本的にはペアワークとし、相談しながら活動させた。作成した summary は別のペアと交換させ、生徒同士で添削をさせた後、提出させた。添削する際には、よい箇所には赤のアンダーラインを、間違っている箇所や気になる箇所には青のアンダーラインを引かせた。青のアンダーラインの部分は、提出前に、再度自分で書き直しをさせた。

<資料7>

Lesson 3 She Helped Abolish Slavery WORKSHEET ⑦

No. _____ Name _____

Q1. Pull out the topic sentences from each part of the text.

Part 1
→ "Wish Hattie had been a boy."

Part 2
→ The Beechers had always been against slavery, but... what a terrible thing slavery was

Part 3
→ She began to write and the story kept growing and growing in her mind. She wrote about a slave named Tom.

Part 4
→ But his middle daughter, so bright and quick, a woman, a wife and mother, had finally had more power and influence than any of his sons.

Q2. Write down the summary of the lesson.
"Wish Hattie had been a boy," her father said, Lyman Beecher was sure that preachers were the only people with real power and influence. And the Beechers had always been against slavery, but now Harriet saw for herself what a terrible thing slavery was. Because she began to write and the story kept growing and growing in her mind. She wrote about a slave named Tom, who was sold away from his family and about a beautiful slave named Eliza, who ran away with her young son when he was to be sold to a new master. But his middle daughter, so bright and quick, a woman, a wife and mother, had finally had more power and influence than any of his sons.

(キ)活動Cに関する事例③ 最も印象に残った文を選び自分の意見を書く活動

topic sentence をつなげて summary を書く活動を何回か実施することで、英文を書くことに対する抵抗感が減り、書く量も増え、書くスピードも速くなった。topic sentence を正確に抜き出す作業をすることで、内容理解が深まり、Q&Aのような他の活動においても日本語訳に頼らずに英文を見て考えるようになってきた。そこで、ワークシート(資料8)を用いて、各パートの中から生徒自身が最も印象に残った文を抜き出させ、その理由やそこから考えたことなどを書かせる活動を行った。文を抜き出すことはできても、その理由や意見を英語で書くことは、生徒にとっては難易度の高い活動であり、自分が思うことを英語で表現できずにいる生徒が多かった。そこで、どう表現してよいか分からないときは日本語で書いてもよいということにした。日本語で書かれている部分は、教師が添削する際に英語で表現するようにした。

<資料8>

Lesson 3 She Helped Abolish Slavery WORKSHEET ⑧

No. _____ Name _____

Q. Pull out the most impressive sentence from each part of the text lesson, and write down the reason why you chose it.

Part 1
→ She knew her father loved her and was proud of her.
The reason: They are good relationship. It is important to think about the feeling and warm heart of people around me.

Part 2
→ But what could she do? Nothing.
The reason: She wanted to do something like her father and brother. I could understand her feeling.

Part 3
→ There was still nothing she could do - except, perhaps, she could write a story that might make people see that of course
The reason: anyone who was held as a slave would try to escape. I think she is strong, because she can find what she can do. She has courage to write such story

Part 4
→ "So this is the little woman who started this big war," he said.
The reason: President Lincoln admitted her. She didn't give up her feeling. She is strong.

(ク)段階Ⅱ・Ⅲの研究内容の考察

段階Ⅰで課題と感じたのは、「読む」ためにも「書く」ためにも生徒の語彙力が不足し

ていること、教師からのインプットは増えても、生徒のアウトプットが不足していること、まとまりのある英文を書くことが難しいこと、の三点である。この課題を解決するために、段階Ⅱ・Ⅲでは、様々な指導を行った。英語で質問をする際も必ず補足質問を加えたり、“What do you think?”という質問を頻繁に投げかけたりした。ペアワークやグループワークも多く取り入れ、生徒同士のやりとりを増やしたり、分からないところは教え合ったりできる雰囲気を作った。また、「書く」ことに関する活動も多く取り入れた。リーディングの授業であるので、読んだ内容に関して何かを書くという活動が多かったが、「書くこと」自体に関する抵抗感は少し払拭でき、書こうという姿勢が見られるようになった。しかし、書いた英文の正確さという観点で考えると、まだまだ指導が必要であると感じた。到達目標ごとの考察は以下の通りである。

・活動Aの到達目標の達成状況

生徒の語彙力不足の問題について改善を図るため、授業の導入で word matching の活動を取り入れた。単語の意味を日本語ではなく英文で理解させる形式にしたが、生徒は英文中の語句についても推測しながら、意欲的に取り組んでいた。また、これまでは topic sentence を探すことで本文の大意把握を行っていたが、今回は英語で先に問いを与え、その答えを探すという方法にした。生徒は、scanning しながら、必要な情報を探しながら英文を読んでいた。到達目標は概ね達成できた。

・活動Bの到達目標の達成状況

生徒のアウトプットを増やすことを目標に、本文の内容理解を深めるための T/F Question や Q & A を生徒自身に作成させた。教師からの T/F Question や Q & A を継続して実施してきたため、生徒にとっては取り組みやすい活動であった。最初はパターン化された質問であったが、徐々にいろいろと工夫を凝らした質問を作成できるようになった。作成した質問は、最初はペアで、次はグループで質問し合ったが、楽しそうに活動しており、目標であった生徒同士の英語でのインタラクションを増やすことができた。

・活動Cの到達目標の達成状況

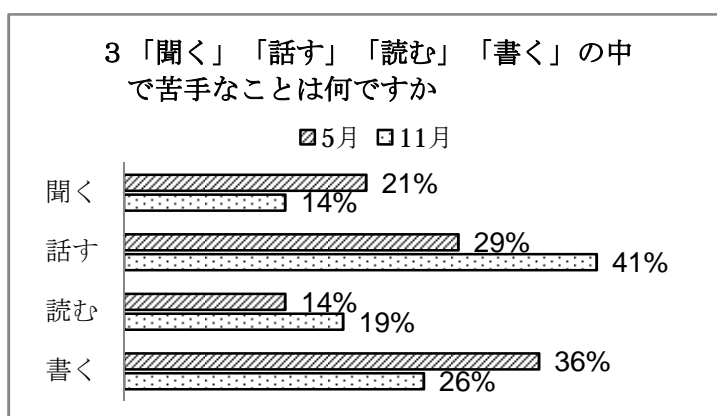
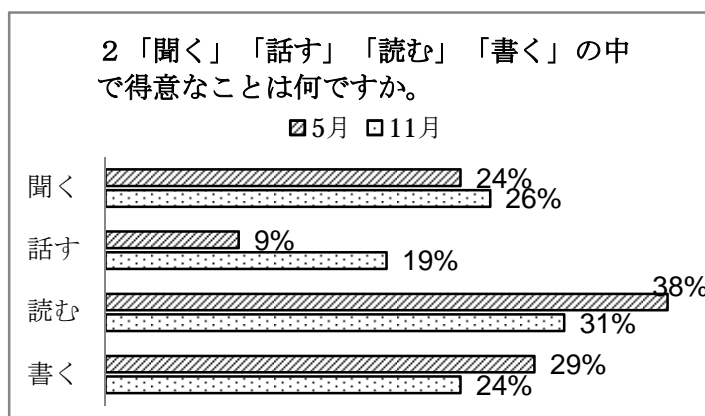
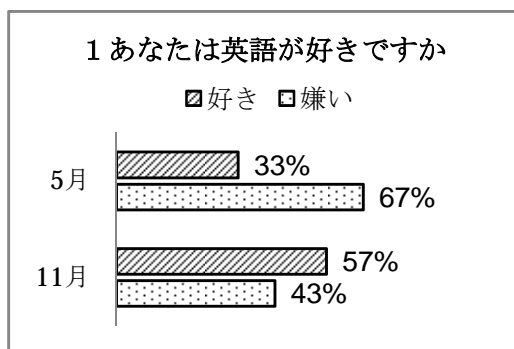
summary を書くという目標に対して様々な活動を行ってきたが、英文を書くこと自体に苦手意識をもつ生徒が多く見られた。しかし、ペアワークやグループワークで実施することで他の生徒と相談したり、話し合ったりして、前向きに取り組んでいた。生徒の「書く」意欲を喚起できたという点においては有意義な活動であるが、生徒のやる気を持続させる工夫が必要である。

印象に残った文を探す活動では、本文を各自でじっくり読んでいる様子が見られた。自分で文を選ぶことができて、理由や意見を書くということになると、モデルになる文章がないため戸惑っている生徒も多かった。書きたいことはあっても英語で書くだけの語彙力や文法力が不足し、「〇〇は何というのですか」という質問が多く出た。今回は生徒自身の感想を文章化することに重点を置き、文法的なことは気にしなくともよい、どうしても英語で表現できないところは日本語を使用してもよい、という指示を与えたことで、少し気を楽にして活動に取り組めるようになった。理由を書かせる活動においてはさらに指導の改善が必要であり、今後の課題である。

5 検証とまとめ

(1) 事後アンケートによる検証

これまでの活動を振り返るために、11月に事後アンケートを前回と同じ内容で、同一の集団を対象に行った。結果は以下の通りである。



*以下は主なものを抜粋

- 4 英語を「聞く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・会話の内容を理解できるようになりたい。
 - ・相手が言ったことを理解してあげたい。
 - ・リスニングテストで満点が取れるようになりたい。
- 5 英語を「話す」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・片言でも相手に伝わる程度に話せるようになりたい。
 - ・会話ができるくらいになりたい。
 - ・自分の言いたいことを言えるようになりたい。
- 6 英語を「読む」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・入試の長文問題に対応できるようになりたい。
 - ・辞書がなくてもすらすらと読めるようになりたい。
- 7 英語を「書く」ことに関して、どのようなことができるようになりたいですか。
 - ・入試に対応できるくらいになりたい。
 - ・長い文が書けるようになりたい。
 - ・理由や意見を書けるようになりたい。

6月のアンケートでは67%の生徒が英語は嫌いと回答していたが、今回のアンケートでは結果が逆転し、57%の生徒が英語が好きと回答した。理由は二つ考えられる。一つ目は、様々な活動を通して教師が授業中にできるだけ英語を発話し、英語でのインタラクションを意図的に増やしたことで、英語を話す雰囲気ができ、英語に対する苦手意識がなくなったからだと推測できる。二つ目は、訳読式の授業では、生徒は受け身であったが、活動を取り入れることによって自発的に授業に取り組むようになったからだと考える。また、英語によるやりとりを取り

入れた活動、コミュニケーション活動を数多く実施したことで、前回と比べて、「話す」ことが得意だと答えた割合が増加した。しかし、それに比例して「話す」ことが苦手だと答える割合も増加したことは、英語を話すことに抵抗がなくなってきた反面、その難しさを実感したからだと考える。また、生徒の意識の変化は、問4から問7の4技能に関してどのようなことができるようになりたいか、という問いに対しても見られる。特徴的なことは、それぞれの技能において、授業中に取り組んだ活動を通して感じたことが多くなり、具体的な目標をもつようになったことだ。思うように活動ができなかった悔しさなどが、もっとできるようになりたいという向上心につながったと考えられる。

(2)まとめ

今回の授業研究にあたって仮説を二つ設定した。

仮説1に関しては、今までの活動の様子やアンケート結果から概ね立証できたと考える。教師が英語で問いかければ生徒は英語で答え、日本語で問いかければ日本語で答える。つまり、授業中に教師ができるだけ英語を発話することで、生徒も英語を話すことへの抵抗が減り、教師対生徒、生徒対生徒のインタラクションは増える。そうすることで、授業は活発になり、生徒は積極的に授業に取り組むようになる。そのような授業を継続して実施することで、生徒の英語に対する苦手意識の減少し、英語でやりとりをしたいという姿勢が見られるようになった。

この研究では、リーディングという教科の目標から、「読むこと」と「書くこと」の統合的な指導をすることで、自分の意見を伝える能力を身に付けさせたいと考えた。これが仮説2から導かれた到達目標であった。読んだことに関して何かを書くという作業を継続して実施してきた。最も留意したことは、生徒に「書きたい」と思わせることであり、「書く」必要性を認識させたことである。なぜ英文を書くのか、それは読んだ英文の内容を明確にし、自分なりの意見を持ち、それを相手に伝えるためであるということ、活動を通して何度も経験させた。英文を書く機会を多く設けることで、生徒の書くことへの抵抗感を減らすことができた。段階的指導を心がけたが、難易度があがると生徒の自主的、自発的な取組が減少してしまう場面もみられ、指導改善の必要性を感じた。

今回の研究を通して得られたことは、教師、生徒双方の意識を少し変えることで、授業がコミュニケーションの場面になるということである。今回は約半年という短い期間での研究であったが、それでも、英語での授業を心がけることで様々な効果が得られた。未解決の課題や反省すべき点も多く残っているが、それらを踏まえた上で、今後の授業を改善をしていきたい。

おわりに

「生徒が英語に触れる場면을充実」させるために、そして、「授業を実際のコミュニケーションの場面とする」ために、「授業は英語で行う」と、新学習指導要領に明記されている。今後どのような授業が求められるのか、効果的な指導法はどのようなものなのか。多くの英語教師が、授業改善の必要性を感じていると思う。今回は、英語を用いての授業の展開方法について研究をした。

「事例1」では、生徒が授業中に英語に触れる機会を増やすにはどうしたらよいか、コミュニケーションの手段として英語を用いる必要がある場面をどのように設定するか、ということを考えて授業を実施した。事前アンケートで「書く」ことを苦手とする生徒が多かったため、コミュニケーション活動を意識した統合的指導も行った。内容を理解させるために、ペアワークやグループワークを効果的に取り入れたり、視覚教材を有効に活用したり、様々な工夫をした。生徒の現状を踏まえ、分かる授業を心がけながら、生徒のコミュニケーション能力を高めていくことができた事例である。

「事例2」では、英語でのインタラクションを増やすにはどのような方法があるのかを研究した。まずは、教師の英語の発話量を増やし、英語のインプットを十分にさせた。次に、生徒の自発的な発話を促しながら、教師と生徒のインタラクションを増やし、最終的にはディベートという形式で生徒同士がインタラクションを図りながら、英語をアウトプットできた事例である。生徒に自己表現活動をさせるために、段階的なタスク活動を取り入れた。段階的に指導することで、相手の考えを理解し、自分の中で整理し、それに対する自分の考えを伝えようとする姿勢を身に付けさせることができた。

「事例3」では、リーディングの授業の特性をかんがみ、英文を読み、自分の考えをまとめ、伝える活動を中心に行った。英問英答などを取り入れ、伝えることと理解すること、つまり英語でのやりとりを何度も体験させた。また、教科書の本文を読む前後に、聞いたり、話したり、書いたりする活動を取り入れて、生徒の英語に触れる機会を増やした。スライド資料を使用したり、ワークシートを工夫したりして、生徒の英語学習への意欲を高め、アウトプットにつなげた事例である。

「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を総合的に指導し、生徒に英語運用能力を身に付けさせるために授業はある。例えば、英語を読んだらそれについて何か書かせる、英語を書いたならそれを相手に伝えさせる、相手の意見を聞いたらそれに対する自分の意見を言わせる、というように一つの言語活動を何か別の活動に関連付けることで、有機的な関連を図った指導はできる。最初から生徒に、言語活動を全て英語で行うことを求めず、段階的な指導をしていけば、徐々に英語力はついてくる。生徒のコミュニケーションへの意欲を高めるためには、まず毎日「わかる授業」を心がけることが大切である。知識を与えることはもちろん大切であるが、それを活用させる場面がある授業が、生徒にとってよい授業であると考え。今年度、文部科学省から全高等学校に「新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例映像資料」が配布された。その中で、初等中等教育局太田光春視学官が授業に求められる10の要素を挙げている。その中に次のようなものがある。

英語を学ぶことや使うことの楽しさ、教師の情熱が伝わる、言い換えれば、教師が良い手本 (role model) やあこがれになった授業である。

学ぶ方法を教え、学ぶ意欲や自信を与える授業が求められている。授業の内容が生徒にとって魅力あるものであること、授業に興味・関心がもてる活動が取り入れられていること、が重要である。生徒に身に付けさせたい英語力は何かを常に考え、魅力あるコミュニケーション活動を実施する必要性を再認識している。

高等学校における教科指導の充実

外国語科 <英語>

「授業を英語で行う」ための工夫

発行 平成23年3月

栃木県総合教育センター 研究調査部

〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070

TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303

URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>